

恋愛経験に埋め込まれるアイデンティティ形成の文化装置

吉田 光宏

序

現代の若者達が経験する恋愛の在り方は多様化してきている。若者達、特に女子大学生が経験している恋愛とはどのような解釈をすることができるか、検証していく。文化構築としての恋愛のメカニズムを探る際、多様な経験から繰り出される一つ一つの「声」の背後にあるメカニズムを文化に関する理論的視点を使いながら浮き彫りにしていく。恋愛感情という個人の心的作用にいかなる普遍的なものがあり、どのような多重層の意味合いが織りなされているだろうか。恋愛関係を巡る社会的背景はどのようなもので、そこに埋め込まれる心性の構造とはどのようなものだろうか。現代社会の恋愛をとりまく状況を概観し、恋愛経験がもたらす情動の背後にあるアイデンティティ形成のメカニズムを探る。恋愛を経験

する時、誰もが至福感や至高感を感じると同時に葛藤や戸惑いや困惑などがあることを知っている。この両極の錯綜した感情が意味するものとは何であろうか。こうした一連の問いを探るために、文化人類学的なホーリスティックな視点でポスト構造主義の射程から、現代社会における恋愛経験にはこの二律背反的感情の動的作用から多様なアイデンティティ構築がなされていくことを読み解いていく。

1 「個人化社会」における現代若者達の支持する友達 感覚の恋愛の諸相

若者達は、市場原理主義のネオリベリズムの社会の荒波に晒されている。その流れの中で誰もが「代替可能」な「資材」として扱われ、不安を抱えながらサバイバルしていくことを強いられている。入れ替わり立ち代わり同時間的に接触

する無数の異なる他者達に取り囲まれている。合理化と合目的化と効率性を最優先にしたグローバル資本主義社会は、人に孤独感と不安感を埋め込む「個人化社会」を同時に形成した。変化と不安定さを伴う状況においては、経済環境や社会環境から求められているものも多様で、人間関係なども、それらに応じて変化していき、その都度柔軟に対応していかなくてはならない。伝統を継承してきている地縁社会においては、個人の行動を支える安定した生成母体が機能しており、個人の問題は「社会」の中において共有され、不安や苦悩を伴う状況は、「社会」の中で解消されていた。成長後もその社会での多様な役割も一度学べば、それが人格形成とつながり自己実現へと結びついていった。しかし、グローバルイズムの流れで、この「社会」が瓦解していくと、その自己の生活様式を各個人で自覚的に変化させなくては、生きていくことのできない状況を招くようになった。予測の不確定性、人の配置の偶発性、脆い共同体などの状況では、その都度異なる状況に円滑に対処していく柔軟な姿勢を身に付けていかなくてはならない。当然、環境の変化に対応できない人は安定性を欠く状況に陥つてしまい自尊心を獲得しづらくなる。こうして、現代社会では、不確実性と多様性と可変性の波の中で、人は「個人化」され「不安」を抱き、思い悩み「疎外」感に晒されることも引き受けなければならない。

こうした「個人化」の流れに晒される女性達はどうのような恋愛関係を形成しているのだろうか。アンソニー・ギデンズは、人は感情的にも感覚的にも対等な「純粹な関係性」を求めると検証している（1995 [1992]）。そこでは、恋愛のパートナー同士が温もりや安心感を見出し、積極的かつ心的に依存し合う関係が構築されていく。この関係は、社会で味わう苦悩や不安から隔離する機能を果たす。当事者の意識は「社会化」された規範やモラル―血縁、社会的責務、伝統的義務、その他地域生活などでの在り方―から来るものではない。この関係では、パートナー同士が自分で統御しうるかぎりでは、互いに関わり合い、信頼しあい、理解しあう。相互の信頼や繋がる感覚は、あくまで、逐次確認していくということが求められている。こうした意識を前提として、二人だけの関係が形成され、繋がり感覚や情緒的安心感を共有し、外部に対しては排他的な関係を形成する。だが、隔離されているとはいえず、価値観が多元化しライフスタイルが多様化していき「人それぞれ違う」個人化社会において、個人のハビトウスという自己の有り様全体も変容していく。自己責任社会において変化の激しい環境で、様々な生活スタイルや新しい考え方を絶えず自分のサバイバルのために「更新」させていくことが求められる。恋愛パートナーには、こうした環境変化に柔軟に自らも変えていくありのままの自分を受け

止めてもらう必要がある。状況は相手も同様である。激変していく現代社会において、パートナー同士が、その都度変わっていく感覚や雰囲気を開示しあい、受け止め合う姿勢が求められているのだ。「純粹」であるがために、個人が変化することをも含め、その感情を守り育て続けていくことが求められる以上、パートナーとの絆を維持させていくために、度合いの差こそあれ、なんらかの緊張感をもたらし、時に努力することも求められている。

ギデンズの議論をこのように読み取れば、自分自身を取り巻く環境変化や、相手の置かれている状況よっては、その恋愛関係はいつ崩壊するかわからないという脆弱性を孕むこととなる。恋愛感情は、社会や家族のように外から守られ与えられているようなものではない。自らが逐次確認し、その感情を互いに共有生成させ続ける必要のあるものである。こうした関係性から浮かび上がる安堵感、高揚感、温もりの関係性は、互いが相手に対して積極的に関わり合い構成しあう建設的な関係が前提となるため、変わりゆく人間の性として、相手に対し不信感や不安感や葛藤なども伴う場合もある（前掲書：106）。よって、このような「純粹」さを前提とする関係は、いつ失うかもしれない最小単位の社会関係であるということになる。こうした状況において、人は、恋

愛感情の中で「温もりのあるもの」「心地良いもの」「快適なライフスタイル」「自分ならではの」という安堵感のあるものを得られる時空間に身を委ねている。恋愛を通して、相手との関係のみならずではの唯一性を伴う感覚を共有し、その閉鎖的な磁場において特有の経験と思いを重ね合わせることで、相手が特別な存在と互いに思うようになる。

恋愛感情を共有することで、人に生の輝きのようなものもたらされることは、例えば以下のような概念で検証されている。人が愛し愛されていると感じる時、そこに「少しの感嘆」と「驚き」を見出し、幸福感を覚える（スタンダー 1971：25-27）。このプロセスには、躊躇いや困惑も伴い、相手が「結晶作用」として特別な存在としてみえてくる。マックス・ヴェーバーの古典的恋愛の解釈に従えば、「俗」の時空間は「日常」の現実世界であり、「聖」とは恍惚感と情動の渦巻く「非日常」的感情の時空で、人はこの二つの世界の相互関係において自己を形成する（1972：135-145）。この前者の俗世間と後者の世俗とは違う感覚を味わう「聖」としての恋愛経験との揺らぎの中で生の「根源と一体化」する（前掲書：145）。日常の構造化された社会秩序の中で、恋愛感情を通じて、希望と喜びと素晴らしさを体験することができ、「とりかえがきかない」存在と共に予感させられる世界に夢と希望を抱く（竹田 2010：51）。相手との関係性で多

様な自己が立ち現れる「未知の自己」との出会いを通じ、新しい自分の「可能性の世界」を感じるのである（前掲書…⁵²）。その世界は、素のままの自分であることで愛されるという全人格的交渉を通じて、自己の承認を得られる磁場である。こうして、自己のアイデンティティがパートナーからの「承認」を得られることにより、自己肯定的な感覚を見出し、夢、希望、憧れ、そして自己の未知の可能性の世界をもたらす。

こうして、恋愛という舞台は、相互承認の場となり、至高感を伴う自己形成が可能になる。この全人格的交渉における承認によって生成される新しい自己は、「かつてない」「新しい」自分を見出し、これまでとは違う世界に生きているように感じる。恋愛で自己はナルシズムの感覚で美化される。ここに妄想や夢想という感覚というよりは、現実には、優しさ、甘美さ、ときめきという感情が立ち現れる。そうした新しい出会いの前とは違う、今までになかった自己との出会いは「素晴らしい」ものであり、可能性と憧れとを自己内部に抱かせる作用がある。自分の存在がなければ、その相手は生きていけない、あるいは、その相手の存在が初めて自分が幸福であるという感情を抱く。こうした恋愛の有り様は、必然的に、グローバル資本主義社会の現実で疲弊してしまつた自己をあたかも浄化させるような体験ももたらす。

このような恋愛経験を、「いくらでも代わりが効く」人材として扱われる合理化された生活世界に布置した時、愛し合う二人の時間とは、明らかに「代替可能」な人を「代替不可能」な主体に変換する磁場である。取り替えの効かないただ一人の相手との恋愛感情の共有するところには、グローバル資本主義社会で疎外された主体に心的な回復をもたらす機能がある。ラカン派哲学者スラヴォイ・ジジェクは、なんらかの形の共同体がその社会的価値と意義を成員で共有するのは、その共同体の存続を脅かし続けているなんらかの力作用であるとしている（2006 [1993] : 382-383⁵²）。二人の関係は、こうした共同体と捉えられ、ネオリベリズムにおける疎外を強要していく環境において、益々その存在意義が特別なものとなる。恋愛を共有する二人の関係は、グローバルに広がる脅威の環境に抗う形で、自らの存在意義を確認しあう唯一性を伴うものであり、対抗的崇高なイメージを形成させる舞台となる。こうして、掛け替えの無い存在として認められる存在としての「代替不可能」な他者との相互関係を重視し、その恋愛関係が「それ以上の何か」豊穡な意味を感じさせられるものと変換されていく。

こうした親密な関係性は、具体的に現代の若者達の恋愛ではどのように語られているのか、雑誌やマンガやテレビドラマなどのメディアで描かれる恋愛言説を分析し検証されてい

る（谷本 2008）。現代の若者達は類似した感覚同士で、互いの関係を決定しない曖昧な関係で楽しさや心地良さを求めるとしている。その際、癒しや遊戯的感覚、雰囲気や趣向が類似しあうことを確かめ合うような「友達以上恋人未満」の感覚を重視している。相手との関係性の中に価値観の類似性や「感覚」や「雰囲気」が合うことを重視し、相手との間を対社会性から閉ざしたものとす、心地良い「二人自閉的關係」を作ろうとする。そこでは、恋人同士であっても、どの時点で恋人となったかが曖昧なものとなり、友達以上に相手に頼っているが、恋人と言えほど真剣には取って置かない。恋愛の関係においても、異なる他者を受け入れるためのものではなく、「つながろうとする」ことを重視する。こうして、例えば感覚の類似性を重視し取って置かない要素は回避しつつ「揺れ」「曖昧性」「未決定性」「遊び」「余裕」を楽しむ、浮気も肯定的なものとして捉え、多様な恋愛関係が生まれていく。このような「非生産的恋愛」かつ「遊戯的」経験としての消費的恋愛から人間性に関わる多様な意味合いが立ち上がると谷本は分析している（前掲書：138）。現代の若者はこうした恋愛から得られるような複数のプロセスやストーリーを刺激的に「消費しようとする」と結論づけている（前掲書：223）。恋愛感情そのものがいかなるものかも確信せず、浮気された際の葛藤は少なからずあるものの、それら

も肯定的に捉える「遊戯的」刺激や心的揺らぎとして捉えている。こうした現代社会の恋愛経験には、「消費者」的心性がアイデンティティ形成に関わっていることと密接な関係がある（バウマン 2001 [2000]：79）。あたかもショッピングを楽しむ時の感情の高揚と享楽と類似する形で、こうした遊戯的感覚は、生活に華を彩ってくれるようなものとして機能し、生の有り様の豊かさが見出されていく。

確かに曖昧性や遊戯的揺れの中に、生の動的な感覚を見出す指摘は意義深く重要だ。だが、ギデンスの純粋な関係性のモデルは、グローバル資本主義社会において、逐次確認しあうことが求められるというもので、当事者が絶えず構築していかななくては存続が危うい脆弱なものであった。「消費者的恋愛」とはいえ、そこに込み上げる高揚感や満足感と同時に幻滅感や喪失感という両義的な感覚ももたらされる。恋愛感情の確信や有り様が未決定のまま先延ばしにされていくプロセスの実際を考へる時、楽しみを味わう時もあるが、多様な失敗や失望感や困惑感等の感情を経験するゲーム的感覚を味わう³⁾。こうして、恋愛は人に心地よさや喜びや面白さだけでなく葛藤、苦しみ、挫折等々の両義的感情をもたらし、いく磁場となっているのだ。

果たして、実際の女子大生達は、現代的恋愛の一つの例として「友達以上恋人未満」を「消費的感覚」で経験している

のであろうか。また、どのような豊かな人間性が見出され確認されているのであろうか。彼女達の多様な「声／ヴォイス」から文化人類学的手法を縦横に使った検証を行っていた。彼女達の語りからは、友達以上恋人未満の関係は、必ずしも「消費的感覚」でも「遊戯的」なものとも言えない別の感覚があることが見えてくる。一人の三年生の女子大学生は、カナダに留学した時、これまでの恋人とは別れたが、一年後帰国した際に連絡があり、再び会い始めるようになった。だが、この昔の恋人には「気持ちがあったのかもしれないが、理解してもらい、友達である」ということを前提に会い始めた。この関係は、お互いに双方の思いを重視し理解しあう関係で「自分にとって都合のよい」「自分のわがままを受け入れてもらう」感覚で、お互い遠慮しない関係で、自分を曝け出すような感覚であったとする。自分は「心配性」と感じており、何か悩み、眠れなくなってしまう時は、その相手に電話をして来てもらい悩みを話したり、ただ来てもらって食事をしたりすることで、不安感を解消していた。自分の全てを話しあえるという点で「全人格的な」関係だと考える。彼女によれば、こういう感覚は恋人に対しては求めることはできないし、ましてや同性の友達にもできることではないものだ。彼女には年の近い弟がいて、その「弟みたいで、あたかも家族の一員のような」親しい信頼関係であったと

する。恋心と違うのは、その相手に対して「好きだ」という感情もなく、また、恋人に対してであれば持つような情感や甘えの意識は無く、「身体の関係もたず」、相手が「そういうことを求めてきそうな時は、きっぱりと断わり、理解してもらっていた」。恋人とは違った意志疎通や感覚そのものを楽しむ関係である。同性同士の友達であれば、相手の立場や状況を考えるが、この相手であれば、どのようなことも話しをする「全人格的交渉」が行われる。

唯一、感情の葛藤は、自分に恋人ができた時に、この関係を断つ時であったと述懐する。新たな恋人にとり、この男性の存在は、受け入れることには困難であると判断し、そのことを相手に包み隠さず伝えた。その時、恋人に別れを告げる時同様に「自分が悪者になる」という感情を体験し、更に「辛い思い」をした。これまでのように相手との感情の共有ができなくなり、その上、もはや自分が相手の期待には応えられない「悪者」であるという認識を自己の中で抱いた。この葛藤が「辛さ」として経験されたのだ。ただ、新しい恋人との関係のためにも、その感情は引きずらないように、出来る限り自分で「割り切る」ようにした。また、これまでの関係で共有した独特の「わがままを受け入れてもらう」ような感覚は、現在の恋人には持ち込むという事はしない。その強度こそ差異があるにせよ、相手との関係の気持ちの有り様

の差異に応じた、相互の理解力や感情表現や包容力が、いずれの関係性においても重んじられている。

この関係は、確かに、感覚の類似性を土台にしているものではある。パウマンが言うように「安全で快適な時空間を求める消費的」側面が確かにある(2007 [2004]: 207)。つまり、「現在」という感覚を「未来の利益や目的のために成就させていく」のではなく、「現在」という時以外には味わうことのできないものを享受していこうとする「可能的世界」に身を委ねるものである。しかし、「消費」と「生産」という二項対立で、後者を捨象させている感覚とは、やや異なるものが伝わる。彼女には、自分の軸というものがあり、出会いの中で自己をその都度違う状況で生成されていく感情を大切にしている。つまり、友達以上恋人未満という関係での自己と、恋人同士の間での自己とはまた異なった自分を演じ分けているという点で、自己をその状況に応じて構成させている。恋愛感情では成立しない「わがままを素直に言い合える」「全人格的」関係だ。恋人に対しては恋の思いを大切に、そこまでの感情を持つことの無い相手に対しては、その関係ならではの友愛的感情を率直に共有しあおうとする。

愛し合う関係においては、互いに他を思い遣り、その都度自己を構成し、全てを相手に依存し受け止めるというよりは、相手が求めるものを省察的に考えつつ、自己の有り様を

形成していくという自律的かつ他律的思考感覚が作用している。そこでは感情の整理も行いながら、時に葛藤や軋轢を感じつつ自己を演じる。ここでの恋愛経験では、「曖昧」な関係や遊戯的感覚、また、浮気を肯定的に捉えてはいない。むしろ、その多様な他者との出会いの中で、その時に込み上げてきた感情を大切にしつつ、自己をその都度構築している舞台が友達以上恋人未満の関係と言えよう。恋人とは違った感覚で、自分の思いと相手との関係をと真剣に考える意志が存在する。

この友達以上恋人未満の関係において感じられる「家族のような」感覚は恋愛の揺れの中にも経験される。例えば、次の女子大学生は、心の不安定な揺れから、恋人の中に家族的感覚を改めて感じている。この女性は「真剣につきあっている相手」がいたにも関わらず、その相手が浮気をしたことを知ってしまった、ひどく傷つき喪失感を経験している。その際、相手を責めることはしなかった。むしろ、自分の心の中で葛藤を覚えつつも、「強気」に考えるようになり、「相手がその気持ちであれば、自分でも経験してみよう」と考え、他の男性と身体の関係を持った。それ以来何回か会うようになり、二人の男性と同時進行的に会うようになった。ここで、この新しい相手と、これまでの「本命」の相手とは感情が違うことに気付く。「本命」の相手とは、あたかも「家族のよ

う」で信頼しあい依存しあっている。他方、この浮気相手とは新しい恋と似たものを感じていた。だが、自分の中で異なる恋愛感情を省察し、結果的に「本命」の相手と理解しあうことで、その浮気相手との交際に終止符を打った。この際、互いが浮気をしたことを理解しあい、許し合うということにより「繋がり」を修復し、新たな関係を再構成させていったのだ。ここでの感情の揺れは、確かに曖昧性や遊戯性が介入している側面もある。しかし、先の友達以上恋人未満の女性のように、この女性も、「真剣」な恋愛においての「家族のような」信頼感と、「遊び相手」としての浮気を区別してもいる。そして、この女性の場合、恋愛に信頼感と安堵感を求めている。確かに揺れもあり消費者的感覚も介入しているが、この浮気相手を通じて新しい自己を形成し、また関係性を再修復出来る自分という形で新しい自我を生み出している。こうした自分のありのままを相手に曝け出し、その「素のまま」を受け入れ合おうとする「家族のような」感覚に恋愛感情を見出す感覚とは、全人格的交渉を伴う真剣な恋愛のまた少し異なるものとして受け入れられている。こうした「家族のような」恋愛パートナーをもちつつ、「友達以上恋人未満」とも言えるような男性を持つ女性は多い。一人の女子大学生によれば、異性との友情の方がむしろ女性同士以上に、本音やありのままを話しあえると考えている。家族的感

覚で違う形で繋がり形成をすることにより、自己を多様に生成させているという点で、創造的感覚がある。

こうして、時間の流れにおいて、人との巡り逢いの中で、柔軟かつ自己を大切にしていくなかで意志を凜として持ち、それぞれの関係において異なった感覚を自分の中に吸収し、大切な他者と、それぞれの違った感覚を形成している。友達以上恋人未満の相手に対しても、「本気の恋愛」相手に対しても、現実社会においての不安や葛藤を曝け出し、自己のありのままを受け止めてもらえるような重要な他者であり、その関係のみにあって共有できる多様な感情の経験そのものを大切にしようとする軸のある意志をもった上で成立する。

2 日本文化の底流にある自己意識から生まれる恋愛観

現代社会の若者の両義的矛盾性を包含した形で、自らを見出そうとする感覚とは、これまでも日本社会において受け継がれてきたものである。欧米的自己とは異なる日本人の自己認識の有様を比較し、その日本人の恋愛に息づく日本文化を宮野真生子が『なぜ私たちは恋をして生きるのか』で検証している(2014)。その中で、九鬼周造の『いきの構造』を参照し、日本人の自己認識とは、欠如したことを自ら意識し、そこから「寂しさ」を抱えつつ、「自己」とは異なる

「他者」との出会い、触れ合い、また別れにおいては、新たな感覚を創造しようとする動的なものだ。この一連のプロセスをあるがままに楽しもうとする感覚を追求してきていると述べている。この感覚において、男女関係では互いに惹き合いつつ、その中で、囚われたり執着するのではなく、他者に身を任せる中で構築される自己の有り様がいかなるものかを模索する諸相を示した。恋愛感情に囚われるのではなく、生々流転する現実世界を儂い脆いものと捉えつつ、男女関係もその中でたゆたうという意味で遊戯的なものであることを指摘している。

そうした中で立ち上がる「女性像」とは、幻影であり、虚構であり、フィクションであり、「支配」や「所有」という合一を前提視するところには構築されることは無い。虚構としての男女関係が構築されたのは、日本人の対他感情がある。恋とはリアルでもあるが、ちょうどその感覚が始まる時とは、まさに「遊戯」的駆け引きがある。ここでの「遊戯」は先述のジグムント・バウマンが現代人の恋愛観の一つに見出した「買い物感覚」で関係の曖昧性を楽しむ意味としての「遊戯的感覚」とは異なる。いつ恋が始まり、いつ感情を共有しあうのかは、あくまで、当の本人達のイマジネーションの世界において共有されたりすれ違ったりするもので、リアルとフィクションとの分類が混在している。大切な他者との

関係とは逐次不安定なもので、時間の流れで変化し、瞬間的、刹那的である。こうした時の流れで立ち上がる異性像を形成する磁場が本能的「遊戯性」である。さらに、その感覚に、そうした悦楽的感情と共に苦悩を同時に受け入れた上で、今を達観する姿勢において自己が生成されていく。この心性とは日本人が男女間の遊戯的舞台において共有してきた感覚である。恋愛感情において、自らを委ねる相手は「可能的世界」が生成していく対象で、そこに安堵感を見出そうとし、その相手でないと思わうことのできない感覚がもたらされる。ここで「自己に特権的な固有の体験」を重視しつつ、遊戯的な駆け引きがあり、互いに他の状況を理解しあおうとする「ゲーム」的な感覚が伴う。ミシェル・フーコーは『主体の解釈学』の中で、他者との関係形成維持においては、自己を省察的に捉え「自己を守り武装し装備させる」ことにより自己陶冶としての「自己回帰(コンヴェルション)」の作用があると述べている(2004: 231-262)。自己の有り様を相手との関係で交渉し、判断し理解しあおうとするところには、喜びや享楽がある(前掲書: 232)。自己鍛錬のプロセスで、闘技的精神をもって自己生成していく中で、失敗した際には苦悩や後悔を伴うが、それらを越えた上で相手との関係において喜びと安堵を見出そうとする。自己を磨いていくことは、永遠に満たされるものでもなく、完結されるものでもな

い。恋愛には、こうした側面がある。自己自身が感じる苦悩や艱難や孤独とは、自らが作ったものであることを認識し、それらを克服し「超越」する感覚が求められるものだ（宮野 2014：131-133）。

男と女との距離とは、互いに他との関係において無限に縮まっていきながらも遠ざかるもので、合一などありえない。自らのあり方を大切にしつつ、相手を受け入れる超越的可能性のある側面がある。二人の関係に溺れるのではなく、どこまでも対立しつつ、引き合い、互いに自由であろうとする動態の関係において自己生成をしていく。相手との関係において、「動態的可能性」を持つからこそ「どうなるかは分からない」。この「分からなさ」をつきつめると、不確定性、不安定性、不確実性が伴う。恋に戸惑い、明日どうなるかは謎であり、相手はどういう存在であるかも期待と不明瞭さと曖昧さのままに留まる。にもかかわらず、想いを寄せ、心惹かれ、時に享樂し、時に悲しみ、幻滅の苦しみも味わうのである。そこに、人間関係の脆さ儂さが必然的に埋め込まれ、自己が欠如している寂しい存在であるということを自覚する（前掲書：67-71）。そして、その自覚は尊い他者との関係において現れ、その他者との変化していく無常な関係に自らを委ね、かつその変化を受け入れ楽しもうとする精神がある。

こうした感覚は、女子大学生達の実際の恋愛経験の語りの

中に埋め込まれている。異性愛での関係では、素のままを曝け出してしまい、そこに自分を受け入れてもらうという合一感ではなく、むしろ、他者である相手とは、なんらかの感情的距離を保つほうが良いと考える。完全に自分の「素」を出してしまうと「家族のよう」な感覚になってしまい、「男と女」の真剣な関係ではないと捉える。双方がお互いのことを理解しあい、恋の感情を通じて、自らの「女としての意識」を感じるができるのが恋愛経験であると語る。ただ、この恋愛経験には、孤独感や寂しさや葛藤があることを感じており、そうしたあわいから浮かび上がる情動があることを認める。一人の大学三年の女子学生は、真剣な恋愛感情を共有することを認識しながらも孤独感や脆さを自己の中に感じていることを語る。彼女は、一定の周期のサイクルのように心の「浮き沈み」があることを次のように表現している。情動の流れを自分でコントロールするというよりは、その感情の有り様に自然体で受け止めようとする。例えば「沈む」時は、感覚的に相手とは「会いたくない時」で「一人にしてほしい」という自己超克的感覚を持ち自分一人の世界を大切にする。また別の時には、その理由も分からず、日常生活の中で否定的になってしまい、相手との関係で好きだという感覚さえ分からなくなり、好奇心で別の男性に目移りしてしまう時だと語る。だが、気持ち落ち着いている時には、例え

ば、休暇の前の時に会えることを楽しみにして、「夏のボーナスが入って、それを自分のために使うよりは君のために使った方が良い」という言葉を投げ掛けられたことを微笑を浮かべながら語る。だが、もう一方で、そう感じつつも「その贈り物を受け取る時に、もしかすると別れ話をされるかもしれない」という心境も吐露する。こうして、恋愛感情は揺さぶられていくが「孤独な自己」の存在の揺れの中になんらかの「軸」を保とうとする故の激しい情動も垣間見える。その内的心情の起伏を楽しむというよりは、現実の相手と、実際の生活世界の中での感情の起伏の中で、「幻影」的意識としての「女」を感じられる所に心地よい安堵感を抱く。だが、それもいつ壊れるか分からないという思いも絡み付くことで、余計にその関係のこころを感じようとする。遊戯的であり、それが確定されていないからこそ寂しさや孤独を感じる。だが、人の思いなど無常な世界にあるからこそ、ここに流れる感情そのものに自らを見出そうとする自尊の精神が貫かれている。

恋愛関係をお互いに共有していることを感じ交際している間だけではなく、次の女子大生は、敢えて「交際」ということを意識せずに、「付かず離れず」の関係を「楽しむ」ことが大切だとする。彼女は、「男は必ず浮気をする」ということを、かつて遠い日に心に傷を負った体験から感じており、

以来「永遠の愛なんて本当は存在すらしらないのでは」と考える。それからは、彼女自身、好感の持てる男性であれば一人だけでなく、複数の男性との関係を形成する。「一人から褒められるよりも、何人もの人から求められる」ことに心地よさを感じる。そして、その関係では、「お互いの気持ちを確信しながら」、敢えて、その感情を共有しないことそのものに自分を見出している。むしろ、自分が実は相手を「好きなんだ」という感覚そのものに浸り、そのことをはっきり相手も分かっているが、相手も同じような気持ちでいるという微妙な感覚に恋愛を感じる。そうした男性とは映画や食事や海外旅行も楽しみ、そこから立ち上がる自己に心地よさを感じる。相手が自分に好意を持ち「女」として欲望していることも察知しつつ、その関係に心酔するように入り込まずに、「弄ぶ」ことに欲びを感じる。また好意の示し方やアプローチの仕方などに洗練さを欠く男性などは「ゲームの在り方すら分かっていない」ため視野には入ってこない。そのような男性には魅力は感じない。また、この関係を持っていても、相手の男性から「何も得られない」と感じた時は、躊躇わずに関係を断つことにしている。社会経験からの考え方や生き方や多様な知識などを学べる男性でなければ、彼女のゲームとしての恋愛の舞台に参入などできない。更に、そうした男性に対して、自分が相手に依存していない分、時折「いつ

振ってやろうかな」と主導権を握っている自己の立場を保つ。つまり、前述の女性とは違い、敢えて真剣にはならないことで、自分が、気丈かつ闘技的でもある精神を持っていることを楽しむのである。また異性から「女として」欲望されているというところに悦楽を感じる。ここでは、一人の女性が、複数の男性との関係に、自らを見出している時、他者と浮かび上がる感情を重視し、それを、「分かってもらおう」「理解しあおう」などと考えていない。相手との関係で浮かび上がる孤独さを脆いものとして、そこに虚無感を感じるのではなく、感情の変化そのものに生の「欲び」の一つの在り方を追求している。「真剣」な恋愛関係などは、こうしたゲーム感覚で「楽しむ」ことができず「つまらない」と感じる。こうした恋愛観から伝わるのは「孤独感」でも「寂しさ」でもない。一人の女性が、規定されたルールの上で幻影としての「女」を味わえるところに心地よさを抱いている。だが、他方で、そうした「男性を弄ぶ」女性の内心では、こういう恋愛経験を肯定しつつも、自分は「人として見下されてしまう」のではないかとも感じている。こうした手練手管を巡らす自分の内面を知られてしまったら、周りから「嫌われてしまう」のではないかと怖れをも同時に抱いている。ただ、彼女に一人の「女」を感じさせる男性でなければ、また、知的にも感覚的にも洗練された男性でなければ、こうし

たこのゲームには参加できないのだ。楽しむだけでなく、ゲーム的恋愛において優位に立ち、それも複数の男性との関係を「弄ぶ」ために距離を作り保つという闘技的精神を持っている。このゲームの根源にあるのは、彼女自身の遠い過去の恋愛経験の艱難から学んだ自己を守ろうとする精神である。恋愛に絡む苦悩や不安感からの防衛的武装により自己超克してこうとする感覚である。こうして、ゲームとしての恋愛では、駆け引きのルールがあり、そのゲームをリードしている立場を保とうとする感覚を磨いていく。その中で、自分の有り様や生き方を楽しみつづ、自分の知的感性をも高めていこうとする果敢な姿勢が貫かれていく。

このように、こうした彼女達大学生の恋愛経験の語りには、日本人の欠如した自己が移ろいやすい関係に身を委ねながらも、そこから自尊心や気丈な心や享楽などを育もうとする感覚がある。そして、「自己陶冶」としての恋愛の有り様も多様だ。相手を信頼しつつも「素のまま」を見せ合い依存しあうことなく自律しようとする所に、一種の孤独感を秘めていた。真剣な相手と接する上でも「自然体」を重視し、時に自分から「一人にしてほしい」と思い孤独感を大切にしながらも葛藤を覚える。だが、また別の時には相手からの好意に欲びを感じてもいた。相手の自分への好意の気持ちと自分の気持ちを敢えて共有するのではなく、そのあわいの中に駆

け引きのゲーム場を形成し、そこに闘技的な感覚を楽しんでいた。いずれの場合でも、相手との戯れや葛藤において、立ち上がるのは「幻影」としての「女」という意識であった。恋愛経験に戸惑いや不安や苦悩と共に、楽しさや安堵感や享樂などの情動の浮き沈みが伴う側面があるという二面性ももたらす。幻影のようなフィクションにおいて、理解することも試み、安堵感も得られる時もあれば、完全に受け入れることもせず、孤独感や虚無感を抱く流れに身を委ね多様な感覚を味わう感覚がある。いづつどうなるか分からない不安、苦悩を引き受けつつ脆さや儂さの無常を観念を共有している。また、その在り方も人によっては、ゲーム的感覚を引き出し、一人の女性が欲びも味わいながら自己の内面を磨く術として恋愛経験を重ねているのである。個としての女の感覚はこうして、相手との「合一」を求めるところに生成されることはなく、むしろ、自律心を持ちつつ、多様な相手との揺らぎの中において、自己を更に高めようという感覚を伴うものとして浮かび上がる。

グローバルイズムの言説で人を孤独な状況に陥らせ、他者と共にある自分に対し豊かな意味を見出しにくくなっている「個体化の貧困」がある現在、人は不安症になり、葛藤を感じ易い存在となる（ステイグレル 2006）。こうした不安な個人の姿は、恋愛を語る女子大学生達に共有されている。ア

メリカの哲学者ジュディス・バトラーは、いかなる人も、根源的に、他者から傷つけられ易い脆弱性があることを暴いている（2007 [2004]）。自己とは絶えず外に開かれた存在で、他者の存在を自らの中に取り込み、その相手の審美眼に叶うようなパフォーマンスが逐次なされ、はじめて自分という感覚を構築することができると力説し、人とは傷つけられる状態に晒されている存在であるとする。自分と大切な関係にあった誰かを失うことは、これまでの自分を失うことに他ならず、今まではまた違う自分を再生成させていくことが求められる（2007 [2004] : 52-54, 71-78⁴）。人は根源的に傷つけられ易い脆い存在であるがために、能動的に多様な他者との関係を築けるように、自らの有り様を絶えず創造させ続けていくことが求められている。たとえ愛し愛される関係であっても、その感情の脆さと儂さを無意識の中で感じつつ、「今ここ」にあるたゆたう自分の生そのもの有り様を受け止める。自分の軸や自尊心を持ちつつも、他者あつての自分を感じている。そこで、純粹に現在という時間を楽しみ耽溺できると同時に、苦しみ葛藤を覚えるという両義的な感情を経験していく中で、新しい自分の有り様をその都度確認し「生」と向き合う。だが、そこで経験する感情は癒しのような「生」に関する「正」の側面だけではなく、辛さや不安や怖れのよ

受けるところに自己を見出している。

3 恋愛経験に埋め込まれるアイデンティティ形成の心的文化装置

こうした恋愛経験のプロセスにおける遊戯的感覚から人は何を生み出しているのだろうか。恋愛が心的にもたらずものをエリーツヒ・フロムの心理学的視点から、アイデンティティ形成の検証を試みる。フロムによれば、人は自分以外の人間と融合したいという欲望は根源的なものであるとし、また、他者との関係を保っていくためには創造的活動が必要で、それは、他者との相互互恵的關係によって成立すると指摘している(1991: 35-37, 48)。恋愛関係では苦悩や葛藤とともに享樂と安堵という両義的世界の中で、人は激しく揺れ動く。恋愛は未来に向けて他者との關係にこのような情動の流れを形成し、そこに自己を投射させる。互いに他を必要とし、共に生きようとし、互いに求め合う時に育まれる共生の感覚がシンバイオシスである(前掲書: 61)。情動の二律背反的世界を引き受けつつ自己の「可能的世界」が形成されるのだ。

人は自分を変えてもらいたいと受動的に支配されることを求める服従心―マゾヒズム的な感覚を持つ(前掲書: 38)。

孤立感や孤独感から逃れるために、指図してもらい保護してもらえぬ人の庇護下に入ろうとする。感覚としてはその人に頼ろうとするものである。「他人の一部になりたい」という感覚である。その他者に対して、安堵感、温もりなどが生まれる。恋人との關係において求める感覚はこのような依存心が宿る。同時に、他者を変化させ影響を与え自分のものとしていきたいという能動的感覚としてのサディズムの側面がある。「孤独感や閉塞感から逃れるために、他人を自分の一部にしようとする」(前掲書: 60)。そうした關係のプロセスでは、自分の生命の一部を相手に与えることである。愛ゆえに自分の「生命感」を与え、それによって、相手にも変化が起き、新しいものとして生み出される。それは、また、自分に週及的に返ってくるものである。自分が与えたものが、新しいものとして自分の所にもたらされ、そこからまた自己の中で新しいものが芽生えていく。

恋愛経験を通じて、他者との親密な関わりにおいて、他者からもたらされる自己とはまた異なる感覚の経験をする。その時、自分が自分自身から解き放たれていき、愛する人に向けて激しく流れ込み合う感覚を味わい、自己の境界の一部が崩壊していく(ベック 1978: 98)。自分の中で、自己の一部を却下し修正をしていくことで変更しながら再構築していく、新しいものを生成していく。こうした他者との関わりと

は、欠如した存在である自己の精神的成長がえられ、世界観や自己の人間性を豊かなものとするものであるということだ。純粹な関係性の中でこの感覚を共有することができ、全く異なる他者でありながら「一つである」という不思議な感覚を求め幻想としての合一感や忘我感が生まれる。そこに、恋愛の両義的感覚が埋め込まれる。

この「合一感」には、これまで見たように、実際の女子大学生達の恋愛関係では多様な情動の起伏が介入しており矛盾した感情すら伴っているものである。恋愛関係の中で幻影として立ち上がる「女」としての自律した姿と、孤独でありながら心を持った軸を持って、恋人と共にあるという感情を大切にしている女性達がいた。また、「全てを受け入れていき」依存しあい知り合う「家族のような」関係に自分を見出す女子達もいた。女子大生達の多様な経験には、言葉では説明できない情動と歪みながらも享受してしまうという矛盾した感覚が介在している。例えば、現代社会では繋がる手段として共に時空間を超越してやりとりできるスマートフォンを使うことによって、カップル同士でなんらかの思いを共有しようとしても、その関係で脆さや孤独感を感じ、その感情は不安定なものだ。連絡をとつてもなかなか返信が帰ってこない時など苛立や居心地の悪さを感じている。また、一人の女子大学生は、一度「好き」だと言ってもそれが本当かどうか不安

になり、相手の気持ちが分からなくなって戸惑う。一度自分が「好き」だと思っても相手にどの程度その思いを寄せて依存していったいいの心配感を抱く。そうして、恋愛にまつわるやりとりに夢中になっている際、ふと、そこに垣間見える過敏さや過剰さが、次第に自分でも把握できないまで感じてしまい、「なんだか面倒くさい」とさえ感じる時もある。恋人との関係は「素のままでもいい」関係を求める一人の女子大生は、初めのデートの時「彼氏のために、いろいろ化粧やファッションを考えていてデートをすることが楽しい人にとっては、素晴らしいのかもしれないが、それが果たして相手の好みだろうか」と思い悩む傾向がある。ファッションや化粧自体が嫌いなわけではなく、恋人の好みを考えて自分を作ろうとすることが「重荷」に感じている自分に気付く時もある。現在は「本気」の相手がいらないが、「素のまま」を受け入れてくれる人に出会い、ファッションや化粧で「気合い」を入れることも好きなため、相手の好みを過剰に気にせず、自分を装っていくことが苦にならないような相手との出会いがあれば「素敵だ」とも考えている。

「相手の一部になろう」とする時、あるいは相手との関係に繋がりを求めようとするときは、内から込み上げてくる激情を伴うようなことが起こる。「わたし」という感覚においても相手との関係で激しい揺れが伴う諸相を女子大学生の語

りから更に浮き彫りにしていこう。ある一日の大変な日常の時間の流れで、朝起きた時は一日に希望と期待を感じて、その場には居合わせていない恋人にラインで連絡をとり始める。だが、学校生活とアルバイト等において現実の辛さを身体と心を通じて感じてしまい、ラインでその都度報告していく中、一人で夜床についた時「わたし」にのしかかる重圧のようなものに圧倒されてしまい、ひたすら涙がこぼれ枕を濡らすことも多々あった。この情動の揺れの経験は、相手と一緒にいる最中にも感じていた。この女性の相手の男性は、一時期、彼女を「束縛」しようとして、一人で外に出歩く時は、必ずラインやツイッターなどで、画像を送ったり報告してくることを求めてきていた。こうした女性に対する男性からの束縛への抵抗感是他の女子大学生も感じていることでもある。この女性は、このことに対し、最初は愛情を示すためだからと思いい、その通りにしていた。が、やがて、その感覚が愛だとは感じられなくなり、相手にそうしたことは自分への不信感があるかのように感じられ、束縛されている感覚もある。今後は自分はしたくないという意志を告げようとしたが、ここで感情の葛藤を覚える。この心理的苦悩を相手に打ち明けた途端、悲しみも同時に込み上げてきてしまい、自分というものが分からなくなり、ひたすら相手の前で涙した。自分という自律した時空間を大切にしたいという感

覚と、相手の気持ちがあつて「わたし」の存在が成り立っているという恋愛感情の揺れた感情を大切にしている。だからこそ余計に自分でも予想しえなかつた多様な感情の表れが、自分でも絶えきれないほどに襲ってきたのである。

こうした掛け替えの無い相手への愛情が、時に自分でも対応できないほどの情動をもたらし、圧倒する感覚をもたらしものとして、また別の一人の四年生の女子大学生の異なつた経験がある。今となつてはもう過去の相手は地方出身の「勉強もできる」恋人だった。この関係を大切に思い、「わたしと二人で過ごす彼の部屋が散らかつていて汚いのは嫌だから」と考え、授業の合間に彼の部屋に行つては掃除をしたり料理をしたりした。そうしながら、ある日突然「一体自分は何をしているのだろう」と、この関係について、大学一年生の時からの親友に幾度も体力的精神的辛さを訴えることをしていた。この一途な思いに懸命であつたと同時に葛藤や虚無感で苦労したこの女子大学生の一連の経験を、この親友と語り合い、「まるで通い妻みたいだったね」と笑顔で形容する。既に、過ぎ去つたことでもあり、こうした想い出話で笑いあう二人だ。だが、その時の本人にとっては「彼への愛情」表現の一つだと思ひ真剣だったのだ。恋人のためには、自分を相手の好みに合わせて変えていくことを楽しみに感じ「女」であることを意識している彼女だが、こうして、その思いが

強くなり、身体的にも無理がくると、疲弊を感じていく。夢中になり我を忘れていった時、演じていたはずの自分に圧倒されてしまい心的な苦悩を覚えずにはいられない。女性にとって恋愛関係は時に重く感じられる場合がある一方で、掛け替えの無い自分を感じられる時も出てくる両義的な情動をもたらしめるのだ。

恋愛で「合一」感と戯れることはするが、その状態に至ることは不可能であるからこそ、そこから多様な物語が生み出される。その思いの強弱や浮き沈みによって、時に懸命になり、夢中になり、新しい世界が彼方に予感されるような至高感を得る時もある。だが、見てきたように、この恋愛が人にもたらし極端は、苛立や戸惑いを伴い、時に過剰なものとなり絶えきれない「重さ」に変わることすらある。思いが強く真剣であればあるほど、こうした矛盾した思いを抱かせる。このような本気の恋愛を肯定する女子学生は実際多い。一人の女子学生は、楽しみや心地よさや快適さのみ追求する「消費的恋愛」を体験したことを振り返り、相手との関係で「人格的な部分」まで踏み込まないで、その関係に力を注がないような関係は「恋愛」ではなく「恋愛ごっこ」だと批判的に捉える。つまり、「曖昧」で「消費的」関係では、その人の有り様全体を感じることは困難で、むしろ、お互いの喧嘩や摩擦など情動の起伏で生のエネルギーを使い精神的疲弊を感じ

じられる「素のままの自分」と「素のままの相手」との相互交渉をすることが本来の恋愛だとする。当然酷い衝突はできれば回避したいが、二人は価値観が異なってくる時があるのが自然であって、「曖昧」「消費」というような関係では人間の根幹的なものを探り知ることはできないとする。そうした異なった部分も含めて惹かれ合うという、恋にからむ訳の分からなさや、理由では説明できない混沌としたものや矛盾があるからこそ面白さがあるのではないか。そうして、時に衝突しあい、苦しみ、悲しみ、その上で、理解しあい、受け入れあい認めあえるようになるのが恋愛の姿だとする。このように、相手に身を投じることによって、内面的に磨こうとしたり、相手をより深く理解しようとしたりすることで、人間の成長が得られることを指摘する。

また別の女子大学生は、自分には「本命」の恋人がいながら心の揺れから、他の男性と身体の関係を持つことで新たな違和感が自己の中に形成されたことを吐露している。この浮気相手の男性は、男友達も多く信頼を持たれ、かつ優秀な大学生として評判で、自分でも「自慢の彼女」がいる。その相思相愛の関係を写真に撮ってはフェイスブックに上げ皆が見れるようにしている。この男性と浮気をした女性は、この微笑む二人の写真の数々を見ると「気持ち悪い」と率直な嫌悪感を表現しつつも笑みを浮かべる。この女子大生自身、現在

進行形の相手の存在が希薄になった時に、好奇心から浮気をしたくなるが、その度事に「一体何をしているんだろう」と思い直し、元の「安定さを求められる」関係に戻る。浮気相手の男性も本気であるはずの感情を共有する相手がいるにも関わらず、他の女性とも関係を持つている現実、そして自らも相手がいながら、他の男性に「眼映り」してしまう。こうした性愛の「脆さ」「危うさ」の現実に対して人間性の有り様の受け入れ難い矛盾と居心地の悪さを画像に読み取るのだ。恋愛関係においては、苦しさを経験し安らぎの場が得られないこともあるが、それらの感覚は、麻痺させられ、無意識の領域にもたらされ、時に安堵感と至福感をもたらず。だが、それら得られた感情とはいっぴかなる形で崩壊するかわからない関係でもあり、矛盾があり言い難い「気持ち悪さ」すら到来するものとしても成立してしまう。このように人間の根底には説明できない情動のようなものもたらすが恋愛である。

自らの多くの「真剣な恋愛」を重ね、その経験を省察しながら「恋愛は自分への挑戦」だと述べたのは、自律心を大切にする四年の女子学生の発言だ。恋愛パートナーとは競い合う意識もあり、アメリカの留学から帰国してから英語が「かなり出来るようになった」と認識すると、当時つき合っていた相手は、彼女に触発され自ら渡米していった。久しぶりに

帰国した際、「おまえより俺は話せるようになった」と言い現れる。だが、彼女は、その相手の自信ありげな発言に、次のような淡白な言葉を返す。「だから何」。そう無碍に言い突き放した。その時には、既に、彼女には新しい相手との関係を構築していたのだ。だが、そうした惹き合いながらも対等な関係を大切に感じてきている。また、自分とは異なる相手の有り様を「素のまま受け入れよう」ことを大切にしているところに、多様な情動の起伏が介入し、自分の感受性がこの女性の心中で響き合う。そして、これまで培ってきた人間性そのものの有り様が、互いに惹き合ったり、牽制しあったりする感覚に「挑戦」という言葉を感じている。挑戦である以上、失敗はあり、時に焦燥感もあるが、それらを肯定していく。だが、同時に、彼女は安堵感と自然体を大切にしている。現在の恋人とは同棲をしており、その真剣な関係との間では「女」を演じる関係ではなく「彼の彼女」として「家族のよう」な関係だと表現する。彼女にとっても、現代社会は「生きづらい」と感じている。多様なアルバイト経験の中でも、ある夜、お酒を作っている時に、その責任の重さと回転の早さに、気付いたときは上半身がしびれ出し過呼吸すら覚えたことがあった。だが、接客の場を取り仕切ることができていることに意義を見出し、その社会の中に一人の自律した自己の有り様を肯定的に捉える。そして、こうした目まぐるしい

仕事環境に晒されざるをえない自分にとっての「心の強い支え」が現在の恋人だ。他方で、銀座や六本木のクラブからホステスの仕事を幾度となく提示されては断わってきている経験を持つ彼女は、刺激的な関係性も求め、浮気に対しても肯定的な考えを持つ。本気の相手の「彼女」として「家族のような安堵感」を得られるのはまた異なる別の世界も大切に、刺激やときめきのような感覚を追求する。彼女にとつては、多様な恋愛を経験することとは、知の探索であり、「新しい課題」への「挑戦」の一つでもあり、こうしたところには、「恋愛は人間の根源的なものとかかわるもの」であると、その彼女ならではの考え方が貫かれている。「これからわたしがどのような女性になれるかどうか想像できない」と感じている。また「人生は短い」と感じつつも、大切な相手と共に「少しの生きる価値」を見出し、そのこと自体に充実感を少しでも見出せるのなら、それ以上のことは求めようとは思わない。「自家用ジェット」で目標を共に目指すという感覚ではなく、「共に散歩でゆっくり一緒に話しながら歩いていける感覚が好き」とする。愛する男性と共に過ごせることそのものに「豊かさがある」とし、温かい家庭を愛する母にもなることにも大きな意義があると考ええる。彼女は恋愛の在り方と自分の働く自己の生き方とを重ねて見ている。揺れ動く自己の在り方を受けつつも、葛藤を抱きながらも果敢に新た

な自己の修正変化をし、新しい自己を相手を通じて生み出すうとしていいる。人を愛するところには、相手という「他者」を自己の中に「取り込み」その関係を育む社会性もあった。外に開かれている自己という状況から生まれる必然的な自己の弱さや脆さを引き受けたいという「闘争」があり、その有りの脆さや傷つき易さに対応していくことが求められる。自我の一部を逐次喪失しつつも修復し再構築していくという絶え間ない修正変更の作業は、自己陶冶のプロセスのものである。その直中には、恋そのものの感慨や喜びや安堵感はあるつつも、矛盾や軋轢を苦悩や違和感も内包している。そうした中で、相手と共に「少しの喜び」を見出しては歩んでいく「生の現実」そのものを愛そうとしているのだ。

愛とは、その恋愛の相手という「他者」、自分とは異質の「他者性」と理由もなく惹き付けられていく作用をもたらす。自己の価値観や存在意義を大切な相手に「委ねていく」行為でもある。その対象を求めることとは、その「異質性／他者性」そのものを「受け入れ」、「価値を認め」、「守っていく」、その相互関係を「開花させ繁茂させていく」(パウマン 2008 [2001]: 226)。そのためには、人の生の在り様に埋め込まれる矛盾と脆弱性と嫌悪感をも、身体で感じながらも葛藤とともに自己生成させていくのだ。恋愛とは時には言葉にはできないような「居心地の悪さ」「自分でも意味の分からなさ」

「気持ち悪さ」をも感じさせるような不気味な「他者」との交渉でもある。あるいは「自分への挑戦」だとして多様な可能性を見出そうとする他者との関わりでもある。「未来を恋人という他者を通じて認識しようとする」ことを可能とする舞台である。他者性の謎と謎解きの難しさに菌痒さと限界を見出しつつも、その克服しがたい「他者」を通じて「どうなるか分からない」「どうにかなるだろうと」留保しつつ、闘技的精神を持つ。その先に何が待ち受けていてどうなるか分からない「ゲーム上でのさいころの一振り」の反復を容赦なく求めてくる未来が押し迫ろうとする。何が起こりえるか分からぬ多様な可能性を秘めた未来という予測不可能性を作り上げていくことを目指そうとする舞台が恋愛である。このように、恋に夢中になる背後にはこうした心的知的作業が埋め込まれる。恋愛とは、成長の過程にある者達が、お互いに相手を思い遣り、気遣い、自己を見いだし、欠けている所を補うという唯一の社会的コンテクストである。恋愛の場で、他者と深くかかわり合う場面に立たされて、初めて、様々な見方や考え方や感覚を学ぶことにより、未知の自己を構築させていこうとする自分に気付く^⑦。恋愛は、他者と自己の物語を多様に紡いでいく舞台であり、そこで葛藤し、悲しみ、苦しんでいくが、同時に、喜びも味わい、楽しみも体感する「社会劇」となっていく。その揺れの中で立ち現れるのが

「女」や特別な相手の「彼女」という感覚である。この「女」という感覚は同質的なものではない。そこに安堵感や依存心や信頼感を見出す自己もあると同時に孤独な自己を受け止め絶えず変えていこうとする「闘技的」感覚が宿る自己もあった。その「挑戦」の中に、「今ある生」を肯定し、一方で、相手との関係で温もりや心地よさを分かち合うことに意義を見出し、また他方で、重さや虚無感や自分では対応できないほどの過剰さも見出していた。いずれの場合であっても、大切な他者との多様な関係性や繋がりがから形成される「自分」という感覚である。

この恋愛の情の獲得に伴う戸惑いや苦悩とは、「内なる異性」としての他者との出会いと実際の他者との出会いに由来すると、ユングは検証している(1995)。普遍的に人の中に埋め込まれる無意識の感覚に「男性原理」と「女性原理」がある。人は男として生まれても女として生まれても、男女共に女性原理と男性原理を持ち、社会環境の中でそれぞれの資質を体現化させる。この社会における自分という意識の中で構築された自己像をペルソナとし、人はそのペルソナの背後に、無意識の構造として、「内なる異性」が潜むとユングは指摘した。女性は男性性も内包しており、男性も女性性を内包する。両性ともいずれの資質も求められる感覚で、その個の統合とバランスにおいて、相互補完的な、統合的な形で

のアイデンティティが形成される。ユングの自我のモデルでは、男性は男性原理を獲得するように成長するが、無意識において女性原理も所有している。男性の女性原理をアニマと呼び、感受性、関係性、直感力、創造性、情緒性を重んじる。女性も無意識の男性原理を所有しており、それがアニムスで、内的力と鋭敏さを持つ資質、実行力や判断力を持つ資質、言葉や言語を巧みに操ることのできる資質、精神的知的指導的能力を持つ資質がある。最初の内的力とは男性の力強さと行為として実行力があるのが「頼もしい」資質である。例えば女性が自らのペルソナとのバランスで自己を構築する際、「肯定的」で「強い」アニムスを「投影できる他者」との交渉が必要であり、それが恋愛対象者になる。通常、この投影は、無意識のうちに男女の間で錯綜しているが、この感覚の強度が高められる相手に対して、自らに潜む「異性」を投射できる者として、ペルソナと連動する形で、アイデンティティが形成されていく。

女性のアニムスの投射が、いかに具体的に行われていくか、恋愛ではなく批判的な形で投影される事例を検証する。アメリカの若者向けのテレビ番組会社MTVが編集制作した『The Hills』というカリフォルニア・ロサンゼルスに実在する二十代女性達の「リアリティーショー」を見て、それを日本人女子大生達は自らの文化的視点で解釈していく。この一

連のシリーズの最初の二〇〇八年に制作された「シーズン1」の中で、ハリウッドにあるイベント企画会社で働きただた二十歳のハイデイが、ある朝、恋人に職場での愚痴をさんざん言うのと、彼は「辞めてしまえ」と幾度か言うシーンがある。ハイデイを理解してあげようとする男性の発言に対し、二人の日本人女子大学生は、「彼氏だったら、きちんと励ましてあげて、送り出してあげるようにしてやるべきだ」と解釈する。彼女達も大学へ行く朝、どこか行く気分では無い時には、大学生として行くことが求められている以上、それを応援するという立場にあるのが、理解者としての恋人の役割であって、情動に流されているハイデイの相手を批判的に見る。恋人同士は、恋愛感情を共有するだけではなく、お互いの社会的立場を理解していること、そしてその大変さも認め受け入れいことも必要だということ、例えば、学生であれば「学ぶ人」、また時にアルバイトとして「働く人」になるのは自律した個人として社会の一員とになっていくためのプロセスを共に歩んでいくべきだという解釈をする。彼女達がそれぞれの強いアニムスを投影をしている恋人は、いずれも「包容力」があるとし、自分が学生であること自体に疲れきってしまったっている時など、そうした状態を理解し、「温かく応援してくれている」ような存在だ。彼女達のアニムスとは、そうした社会における男性に内的力としての判断力や理

性的な言葉を投げ掛けることのできる存在である。女性である自分が、例えば感受性や関係性のみに流されそうな時、そのアニメも認めてもらいながらも、修復させていき、相手を規律規範に則った社会の「主体」として存立できるような「眼差し」を照射させることのできる心情がある。

アメリカでは、「頑なな個人主義」が求められ、自律した個人であることが女性にも男性にも求められ、性愛はそうした「個人」の核の一つとして位置付けられる。従って、本人はたとえそう言われてもその恋愛感情の真意を二人の間で共有しつつ「個」として自分を社会で活かすことが期待される。この「辞めてしまえ」と言われたハイディはその言葉の意味を噛み締めつつ、ボーイフレンドのアニメあふれる言葉を受け入れて理解し、何度も軽いキスをしながら、仕事場に出かけていくシーンが展開される。この映像に映し出される男女関係の有り様に対しての日本人女子大生の内にあるアニメムスによる批判的解釈は、一つには日本とアメリカの恋愛感情の比較では、お互いに、孤立した個としながらも、関係性の中で立ち上がるのが日本の女性であるとすれば、自律を自分の内的なものとして中心に保った上で、相手との関係を維持形成していくというのがアメリカの女性と言えよう。

見てきたように実際の女子大学生達の自己感覚とは、日常生活世界の流れの中で、また、相手との多様な関係性の中

で、揺れ動き、動態的なものであった。同時に、自己の軸を大切にしながらも、感情の激流に流されたり、その流れの中に「孤独な自分の世界」も持ち、浮き沈みを伴う多様な自己の有り様を伴うものであった。彼女達の内包するアニメムスの投射作業とは、自らに「女」や「彼女」を意識させてくれる感覚ももたらした。だがコンテキストによっては、自らも気紛れになり、多様なベルソナを形成していた。性愛を抱かせるその場でのみの感覚的存在であったり、包容力のある存在であったり、戸惑いなどをもたらす「他者」として立ち現れた。あるいは、ありのままの素を受け入れる「友達のように」「家族のように」な存在でもあった。つまり、実際の投射は、動的なもので、その運動は留まることをしない。必然的に、自己の異性の原理そのものを相手が具現化させた「完全な一致」などありえないがために、相互の投射作業には矛盾が生まれ、苦悩や葛藤が伴う(サンフォード 1995: 21-32)。

こうした無意識の精神のモデルに埋め込まれた葛藤や矛盾や困難は、これまで見てきた多様な恋愛経験を生成させていき、その都度、異なった形で恋愛主体を圧倒したり、逆に享楽させたりするのである。パートナーに投射させるアニメムスという内なる男性とは、実際の相互関係で、恋を通じて「心地よさ」、「安堵感」、「家族的安心感」を立ち上げられ、そこに時に「脆さ」、「危うさ」、「過剰さ」の感覚をももたらすも

のであった。彼女達の心的葛藤と揺れをこのように無意識の構造から考える時、確かに、恋愛は、自己の内面の異性的側面を、無意識に投射しあい相互に交渉しあいながら、自己の在り方を自らに向き合わせる。それを受け止めた自己が自己の有り様を省察的に思い「女」であることを多様に感じていく。関係性においては、友愛的感覚で全人格的な形で相互に受け止め合える甘えあう状況も生まれる。だが、他方で、これらの情動の起伏があるために、更に他者を思わせ、そこに孕む矛盾を受け止める。たゆたう時間の流れで立ち現れる多様な他者との関係性の中で、自分の脆さを引き受けることも求めさせる。そこに、自己を見出そうとして、戸惑いや困惑をも感じるが「闘技的」精神で自分という軸をしっかり持とうとする試みもなされる。浮き沈みする情動を受け入れつつも超越しようとする心が芽生え成長していくこととなる。その中で、矛盾した感覚でもあるが、自己の内的感情に流されたとしても、そこに一つ一つの経験を受け止め整理しつつ、柔軟に智慧を働かせ、多様な経験を乗り越えようと自己修正し「自己陶冶」していくことに結びついていく。

4 恋愛感情が創造する自己生成の無意識の構造

これまで見てきたように、恋愛には、喜びや掛け替えの無

さや安堵感など正の感覚を生み出すものであったが、苦悩や孤独や不気味さすら与える負の感覚をももたらすものであった。しかし、そこに理由など鑑みず、しがみつく過剰性と空虚さもあった。更に、恋愛の経験には、自己陶冶の側面もあった。この自己の闘技的精神とは、自己防衛機能として重要な資質として無意識に内在されたものだ。それにしても、そこに、なんらかの自己成長がその彼方に垣間見えるとはいえ、恋愛を通じて、人はなぜ苦しむ経験に自らを委ねていくのだろうか。情動の揺れを引き受け、精神的にも体力的にも疲弊し、圧倒されていくにもかかわらず、また、喪失感や絶望を味わうことを繰り返しながらも、なぜ、人はその中に自己を見出そうとするのだろうか。あるいは、「人から嫌われる最低な」恋愛の在り方ではないかと恐れがありながらも、複数の男性を弄び、楽しむ感覚で恋愛を駆け引きとして主導権を持つとうとする根底にあるものは何であろうか。家族同等の安心感と信頼感を築いた所に「彼女」という立場を確保しつつも、なぜ更に浮気を肯定していき、刺激を求める背後にある心性とは何か。そこには、いかなる人間の文化装置としての精神の根源的在り方があるのか。以下ではポスト構造主義の理論を照射させ、その諸相に迫っていく。

恋愛対象からの「欲望と期待の眼差し」の中で生成されていく情動には際限が無い。恋人という「他者」との多様な揺

れ動く関係の中で、相手の欲望と期待が自分の自我の一部に入り込んでくる。この意味で自分であるという認識には、恋人という「他者の眼差し」が埋め込まれる。このパートナー同士の繋がりにおける眼差しが投射され、多様な諸経験のプロセスの直中において、自分の中に、相手の豊穣な感覚を見出さないではいられない。ここで、恋人である相手が特別な存在として「見えている」時、実は、自分とその相手との間の間隙から崇高なイメージが生成されている（ラカン 2002）。相手の視線の中に投射されている自分のイメージは、もはや自分が以前まで自分として把持していたものは異質なものだ。そこに浮かび上がるのは、互いに他の多様な異質性と障壁を越えようとする際に、限りなく立ち上がったいく文化構築としての「対象a」である（ジジエク 1996 [1994] : 291-293）。

アイデンティティ形成の諸相の揺れと葛藤の構造を前提にしたラカンの主体における「対象a」は、満たされない欲望を抱く人間の心的作用の原動力である「ファルスの機能／関数 (phallic function)」から来る（フィンク 2013 (1999)）。この機能は、人間の無意識の構造において幼児期の原体験から作動し始めているものだ。つまり、男児／女児、それぞれにお互いの両親を見て、異性を認識し、それぞれ母親／父親を求めようとするが、そこに禁止というタブーが介入する。

これは、切断と連続、肯定と否定、受け入れと拒絶、万能感と欠如感、言語による満足感あるいは言語による喪失感等々、原初的な禁止と肯定の言語のルールである。心の無意識に、言語、ルール、規範による構造「ラング」が構築され、そこに成長過程において様々に「投げ掛けられる言葉」「パロール」が身体の中に刻み込まれていく。こうした言葉の網の中に投げ込まれた「子」が無意識で求めようとする感覚が「ファルス」で、自分の欠如や未熟さゆえの不安を静めようとして自分自身の生命を再生成する源となる。この心的生成母体によって、人は、無意識に想像的機能を働かせ自己を拡張し続けるエネルギーを持ち、自己の防衛や闘技的精神を育むようになる。

こうして、ある対象に対して、限界や禁止や規律等々が介入し到達の不可能性を孕む柵から多様な幻想や価値が増殖していく。獲得が困難で不可能なものであると感じる時、その対象から「崇高なもの」「理想化されたもの」が生成増殖していくのである。つまり、制限／規律／規則という限界のあるところに、「ファルスの機能」が作用して、創造性を生み出し、豊穣な価値生成に結びつく。この機能は、多様なイメージ像や幻想的価値を生成していくため、不安定で脆弱な人間の自己防衛活動として、心を静めていく効果もある。禁止されたものへの憧憬、接近しなくても叶わないやるせな

さ、失われてしまったがゆえに余計に欠乏感に襲われる感覚、欠如感に苛まれるがそこにしがみつかざるおえなくなる。崇高な価値の増殖の例として、ラカンは、「手の届かない恋愛」としての中世宮廷恋愛の中に立ち上がる至高性を挙げる。中世宮廷恋愛に注目するのは、階級や婚姻制度を超えて生み出される恋愛にともなう激情と情動が描かれ、その「対象への到達不可能性」の彼方に、自分でも掴みきることが出来ないものを見出し出しているからである（立木 2005: 112）。

恋愛感情は多様な状況から社会秩序とは無関係に生起していく。人と人との間には多様な社会的文化的差異が縦横に限りなく横断している。愛は合理的な理屈や理由や理性では説明できるものではない。むしろ、混沌としたもので、留まることのないエネルギーが渦巻く。また、愛は数字や物などとして見ることも当然できない。そうした無意識の制限や限界を横断するもの、社会的規律規範とは必ずしも合わない形で構成されるものとしての恋愛感情は、十二世紀中世宮廷恋愛の悲恋の物語として知られる『トリスタンとイゾルデ』の中に、そのメカニズムを知ることができる。貴婦人と騎士との禁断の関係から生み出される恋愛感情とはどまるところを知らないが、その禁止された恋愛は成就されることはない。そこから「理想化された女性像」及び「崇高」な感覚

が生み出される。確かに、それは禁止された関係で、社会的秩序規範を横断してしまう愛の在り方の過酷さがある。だが、それゆえに、しがみつこうとするトリスタンとイゾルデの間の恋愛感情には、当然、欠如感や葛藤を抱き、享楽が埋め込まれていく。快を満たそうとするが、欠如感を伴う。しかし、その現実の状況を引き受けざるをえない。対象相手の存在は、ラカンの言う「シニフィアン」という多様な豊穡な意味が託された媒体、または文化的意味合いが凝集される「象徴」でもある。人との体験とは、多様な「シニフィアンの連鎖」との出会い、つまり、様々な経験の有り様との交錯であり、その人から伝わる雰囲気や感覚等々の限らない具体的意味内容としての「シニフィエ」を感じ取る。自分もまたその連鎖するシニフィアンとなり、恋愛関係はもつれていく。時間の流れの中で多様な他者との関係性が生まれては変化していく。自己の内部に残余していく豊穡な意味も多種多様な感情が矛盾や葛藤のあるものとしてされ積み重なっていく。恋愛経験から生成されていく多種多様な意味内容や情動の過剰性は、固定化など不可能なもので、むしろ、人はその波の揺れの中に身を委ねざるをえない。そこに葛藤や艱難をみいだす。この欠如感の世界こそ現実界である。恋愛とは、そうしたものを体験する磁場である。

対象相手との一体化の試みの戯れにおいて、ラカンのモデ

ルでは、主体とは他者との言葉の中に形成され、確認される言語によって構成される。女性であること、男性であること、それぞれの経験や認識から多様な差異が介在しており、そこには現実界が絡み付き、象徴界には汲み取ることのできない多様なものが介入している。つまり、そのプロセスにおいては、「知覚可能なもの」から「象徴化」されることなく、無意識の中に吸収されることなく、排除されていったものとしての現実界／「もの」が構成されている（松本 2014: 270）。現実界の体験とは、それだけではない。宮廷恋愛がそうであるように、恋愛対象との間には多様な社会的、文化的境界線が介在しており、恋という感情はそうしたものを超越して生み出されるものである。新たな距離や接近不可能な条件が入れば、ファルス機能によって、それを超えていこうとする感情が生み出される。だが、その生成能力とは裏腹に、相手との合一化の「到達不可能性」が生まれる。日常生活世界における社会的網や障壁などが介在すればするほど、その恋愛感情は特別なものになっていく。こうして、恋愛をめぐるアイデンティティ構成の挑戦のプロセスそのものに、欠如という「穴」あるいは「空」が穿たれていく。感情や感覚や思いが立ち表れては消えていく状況において、時には自分では理解のしようの無い怒濤の感情の波の中で人はトラウマ的感覚を抱く。ラカンはそうした感覚を「空胞」と呼ぶ

（立木 2015: 100）。恋愛経験において、言葉では説明などできない多様な感覚や情動を抱いている時、「空」としての現実界の直中にある。

ラカン・ジジエクは、その現実界を身分の差異や婚姻制度という社会的境界線が引かれている所に立ち現れることを指摘し、その恋愛の幻想性の普遍的在り方を示した。だが、この「境界線」とは階級や結婚といった、社会において規定される所与のものばかりではない。自己と大切な相手との狭間において、縦横に文化的に構築されていくものでもある。女子大学生達の恋愛経験とそこから立ち上がる多様な感情から、彼女達それぞれの「わたし」という感覚そのものの中に、縦横に構成されるものであった。あるいは、自ら多様な境界線の痕跡を描いていく試みをしていた。そうして、そこに、恋愛を経験する者達は、みなそれぞれの大切な他者との繋がりに合一感とは相容れない多様な距離感や危うさや過剰さを感じていた。例えば、恋人が出来た時にこれまでの友達以上恋人未満の相手との関係に終止符を打とうとして「悪者」になる自分に辛さを抱いていた。真剣な関係を築いていたはずの相手に浮気されてしまい酷く傷ついても「強気」で自分も浮気をしていくところに、またこれまでとは違った感覚を持ち、真剣だった相手により安堵感を抱く自己を見出し、魅力を感じながらも依存はせず、敢えて心的距離を

おき、複数の相手に好意を抱かせるところに楽しさを感じつつ「弄ぶ」感覚で「女」を感じていた。日々の現実社会において揉まれていく自己の脆さを抱きしめている時において、自分自身の心の浮き沈みを経験し、その自己の感情の不安定さから、相手との関係を強く感じたり、戸惑いを感じる流動的自己を見出していた。奇麗好きで世話好きな自分が相手の部屋の汚さが我慢できず、多忙極まる授業の合間を見ては、相手に尽くす行為の中に愛を見出そうとするが、時折疲弊感と虚脱感が自分を圧倒し、戸惑う自分を見出していた。相手が好きであるから、その存在を自分の中に受け入れていき、共に一連の自己陶冶の有り様を見出す一方、自己の内部で、一連の自己陶冶の有り様を見出し「挑戦」する自己も見出していた。こうした多様な感情の経験の中で、「境界線」は、変化していく自己に多様な「負の感情」や「正の感情」をもたらす形で、その都度自分の中に生起するものでもあった。その押し寄せるような波に圧倒されながらも、多様な自己の在り方のこれまでとは違う、「置き換え」としての自己を形成しようとした。「わたし」の中においても理解しきれないような過剰反応をして悲しみや辛さに打ち震える自己がいた。あるいは、多様な感情の荒波に抗おうとするような闘技的精神によって横断線を構成させていた。このように、相手との関係性において自己に縦横に痕跡を残す横断線が文化

的に構築されていった。恋愛関係において振動のようなものを覚える時もあれば、波の動きのように揺れる時もあった。個人は、象徴界という言葉の網の目によって構成されていくため、いかに分かり合っている相手であっても、相互の感情の一致や合一など不可能である。「対象の到達の不可能性」が埋め込まれている恋愛は、人に苦悩と苦悶とをもたらすが、であるからこそ、そのひたむきさや愛おしさにしがみつこうとする感覚が生み出され、享楽がもたらされていく。こうした享楽には、「現実界」が介在しており、恋愛主体に両義的側面を引き受けさせる。だが、それだけではないことを女子大学生達の恋愛経験の語りは教えてくれた。つまり、この相手への思いを抱き、それを示す一つ一つの行動や仕草が豊穣な意味を形成し、時にそれらが、彼女達に、大切な相手との関係性の中に多様に「境界線」が引かれていく作業でもあるのだ。その狭間に、不安定な自己を見出す。こうした人との間に差異や異質性が永遠に形成されていく動的有り様から、絶えず、二人の間の関係が揺り動かされる。二人の間に生まれていく苦悩や悲しみや葛藤などは、二人の間においてのみ意味があるものとして構築されたもので、二人のそれぞれの感情によって、相手への「到達不可能性」の前提を形成するものである。だが、こうした境界線は、二人にとり豊穣

な意味のあるものとして抱きしめられていく。ただ、相手の崇高なイメージに惹かれるという感覚というよりは、真剣な自己の軸の中で「女」、あるいは掛け替えの無い家族的感觉の「彼女」というものを自ら立ち上がらせる条件でもある。同時に、愛そのものに引寄せられるというよりは、それを通じて、時として、「気持ち悪さ」を伴うおぞましさのようなもの、自分で手に負えないような（現実なるもの）としての他者との遭遇をも経験させる。たしかに苦悩や葛藤を抱く舞台でもあるが、より、そこに、自らの有り様を懸命に「闘技的に」確かめようとする「試み」が実践できる舞台である。こうした人が「自分である」ということを多様に豊穡な形で知らしめる他者との出会いと交渉と戯れに享楽できる舞台が恋愛である。

この現実界への接近は、「わたし」という感覚に介入している多様な「他者」達の関係から逐次遂行され構築されるところから生まれる「人間が可傷性(vulnerability)を持った存在である」とことと連動する(バトラー 2007 [2004]: 47)。^⑤ここでの他者とは、恋人でもあり、家族でもあり、親友でもある。恋愛パートナーという大切な他者との関係とは、逐次変化していくもので、潜在的にいつ失われるかもしれないという脆弱性を前提にしたものである。またその関係性の多様な在り方、相手の感情、行動、立ち居振る舞い、仕草、その

他伝わる感覚等々、その都度構築される相互依存的な関係性によって成り立つものである。こうした「わたし」の存在とは、このように、相手との時間の流れで変化する相手との関係に構築されるもので、いつ消滅してしまうかもしれないという儚さや脆さを孕むものである。その人のために存在すると同時に、その人のおかげで存在しているという「危うい」ものである(前掲書…⑤)。であるからこそ、多様な他者との出会いを肯定していき、自己の内部に振動や揺れと共に相手を取り込もうとする生の営みが行われていく。ここにおいて、そうした動態的な「他者」との関係とは、言葉の中に構築され生成され続けるものであり、多様な感情が浮かびあがっては沈みゆくことの繰り返しでもある。その様相は、あたかも海辺の砂浜に打ち寄せる波のようなもので、人はその流れの揺らぎに逆らうことなどできない。

5 「オルターナティブ」的時空である意識状態としての恋愛

相手への愛おしさは、安堵感や心地よさだけでなく、「到達不可能性」からくる葛藤と狂おしさを伴うものであった。心的苦悩や困惑や戸惑いの背後には、外に開かれた根源的人間性の在り方があり、その「危うさ」の中で立ち上がる感覚

そのものを経験する磁場が恋愛であった。この一連の恋愛に絡む矛盾してもいる両義的感情は、現実社会での生の源でもあり、かつオルターナティブな「非日常」の時空を生成する原動力にもなることが多方面の研究から検証されている。つまり、恋愛がもたらすものとは、両義的感情―多幸福感、高揚感、至福感、安堵感と同時に、苦悩、葛藤、不安―であった。こうした感覚は、自己変容をもたらすものとして、理論的に検証されている。文化人類学では、ヴェクター・タナーの非日常的時空で、通常の「構造」的社会関係には起こりえないことが生起する「反構造」の磁場の「コミュニティ」である(1976 [1969])。例えば、儀礼の場で構築される時空間で、その反構造の状態を通過した後新しい社会的人格を再形成する機能がある。心理学で、ミハイ・チクセントミハイ(1996)は、日常生活の営みでなんらかの目的を達成できた時の自己充足感や喜びの瞬間、芸術的な優れたものに出会えた時の感動や高揚感、また、なんらかのものに無我夢中になっている時に味わうような忘我感を「フロー」感覚として、通常の世俗の時間の流れの中にある意識状態とはまた違った感覚を見出していることを検証している。信仰生活だけではなく、至高体験として、アスリートがなんらかの達成感を感じて、得られる高揚状態も類似したものだ。沈黙考した上でようやく糸口や答えなど全体像が見えてきた時の至

高体験や洞察などからも得られる感覚である。「至高体験」とは高揚感を伴うもので、人間の変化や成長において見出されるもので、忘我感を得たり、幻覚的な感覚を得たりするものにも得られる。瞑想やシャーマニズムなど宗教的儀礼において日常生活における理性的意識とは一線を画したものであると人類学では検証されてきたが、トランスパーソナル心理学者のケン・ウィルバーも重視し類似した心的状態をもたらすメカニズムとして検証している(2008)。いずれの概念も、世俗の日常とは別のオルターナティブな世界を指し、そこで、情動的な感覚が身体を通じて横断し、新しい自己が形成されていく心的時空である。人為的、自発的問わず、心理的、生理的、薬物的、その他の手段方法によって生じた人の状態で、正常覚醒状態に居る時と比較して、心理的機能や主観的経験の変容を特徴とする。社会の自然な自己把持の背後において「非日常的な意識状態」を経験している。

こうした心的感覚は仏教的思考としても日常に介在している。人は、今の自己を受入れつつ、自己を逐次否定し、自ら「死を生きる」プロセスにおいて、新しい自己を形成する(釈 2013、西平 2014)。日常生活そのものを修練と修行の場として捉えることにより、行動により得られる身体的感覚による実践知は、自己の生命力そのものを生み出していく。この動的母体は人に自己反省と自己否定を促し新しい自己を生

成していくものだ。この命の息吹を生成していくものが、鈴木大拙が検証した靈性で、自己の個的存在からそれを超えた自己を直指せうとする感覚へと導いていくものだ(1944)¹¹⁾。この自己再生の繰り返しのプロセスとしての坐禪やヨーガは「変性意識状態」を作り、「日常」の世俗を超越した「非日常」としての自己の生成を可能としている(葛西 2010)。ここで現在の自己と、新しい自己の間において経験される「非自己」という存在が「中空」であり、その円環関係において、新しい自己が絶えず生成されている¹²⁾。

こうした靈的自己生成のメカニズムは、恋愛と呼応する。恋愛は、「感情知性」であり、日常の秩序や生活世界での並行感覚の揺り動かされる「意識発展段階」を上昇させたり下降させることが可能な装置である。自己の一部の崩壊と修正、苦悩と享樂とを味わう両義性、異質性や異なる状況を乗り越えようとする時に立ち上がる崇高な感覚、ユングのアニマ／アニムスの投射作業は、苦悩を伴うが、享樂的、快樂的、多幸感も伴う。この両義的な感情が変性意識状態をもたらし、今までとは違う自分が現れ、流動的な感覚、心的高揚感も立ち現れる。そこから新たな自己構築が生成する。あるがままの他者に惹かれていく一方で、その他者との合一には到底到達することなどできない何かがあり、そこに混沌とした理性や言葉では説明できない感覚を伴っていた。多様な経

験と感情の起伏を伴い、この日常世界では経験しなかったものと向き合い、困難や不安など乗り越えるという意味で「苦界」の構成である。その「空無」の狭間にアニマ／アニムスが投射されていただけでなく、これまで見てきたように、崇高なイメージ像、曰く言い難い過剰な思い、時に嫌悪感や孤独さや脆さの感情が交錯する。二人の間に立ち上がるこうした混沌とした眼差しと過剰な思いから、変性意識状態が作られ、更に多様な自己修正がなされ新たな自己生成がなされていく。

6 「器官なき身体」としての恋愛主体

ロラン・バルトは『恋愛のディスクール』の中で恋愛の狂気性を指摘する(バルト 1980 [1977]: 25-36)。恋愛とは手に負えぬ感情を経験させられ、それら全てを耐え忍び、その苦悩を欲びをもつて引き受けてしまうようなものである。恋愛主体と対象との間では、多様な差異とイメージの複数性の錯綜が交錯するものであり、すれ違いや不満や葛藤や苦悩を伴う。だが、その苦悩を引き受け、そこに幸せを見出しては享樂するマゾヒズム的側面があるという狂気性がある。バルトは言う。恋愛は、成功か失敗かなど瑣末なものとして一瞬間によぎらせる程度で、むしろ、それぞれの生の有り様自体

を肯定させ、そして、勝利者もなく敗北者もない揺らぎ自体を受け止めなくてはならない。「悲劇的」なものである、と（前掲書：37-39）。愛は忘我的感情と情熱的感情を併い、自己では統御できないような喜びと共に、不安や落胆や困惑などの両義的感情に挟まれた自己を敢えて引き受けていこうとする。ジル・ドゥルーズ（2008 [1962]：361）が『ニーチェと哲学』の中で言う「肯定の肯定」がこの恋愛に投射されている。つまり、いかなる生の苦難や葛藤も肯定し否定しうる永遠の連鎖による多様な生の動態的在り方は「ディオニュソスの生」であり、それは、そうした生き方を再肯定する他者を通じて自己を投射できるものでもある。

現代社会においては、「聖」と「俗」とは交錯した形で、多様な言葉や言説を浴びていきながら生活している。恋愛とは、両者の間を行き来している中で多様な情動が錯綜する社会劇をもたらししていくものであった。そうして、その時間の流れの中で逐次、その前とその後とで、過去のこれまでの関係性を一部破壊しては作り直すという自己構築を行い、その諸相も多様なものがあり、内的矛盾も内包するものであった。ジル・ドゥルーズは、こうした人に絡む、他者との限りない経験の中で逐次構成されては修正される動態的アイデンティティ形成のモデルを提唱した（2007 [1968]）。つまり、「わたし」という感覚には無数の微粒子的自我がひしめき

合っている。そして、他者との諸自我との接触と交流を通じて、自己の諸自我との関係性で影響しあいながら緊張関係を生み出しつつ、また新たな諸自我を、生成変化させていく（2007 [1968]：227, 269）。「わたし」を構成するこれら局的諸自我には、家族や学校や地域社会の中で刷り込まれる規律規範や思考や理性としての「樹木的」なものと、遊びや消費文化や恋愛経験など感覚や感情や情動を形成する「リゾーム的」なものがある（1987 [2010]）。プロセスで、これまでの自我の在り方の一部を「切り刻み」「切り込み」「破壊」をするというタナトス／死の欲望が絡む。この死の欲望によって、新たな自己が解釈として形成されていく。

男性と女性とが愛し合うところに投影される強いアニマとアニムスとは、こうした変更と修正と再構成をもたらすものである。恋愛での交渉は、アニマ／アニムスの相互投影によりペルソナを再構成し、リゾーム的的自我も形成させると同時に、樹木的自我において再修正していく。自己が他者との関係で相互に影響しあい共鳴しあい、また新たな自己を生成していく。「内なる異性」という他者を投射することにより、「わたし」を構成する局的諸自我が、相手の諸自我との交錯があり、相手の一部を破壊させ再構成させるという点でサディスティック的である。他方、自己が相手から影響を被る時、自己の一部を破壊させ再構成させるという点で、マゾヒ

スティック的である。相互のアニメ／アニメスの投射には、こうした両義的側面あり、その作業そのものに葛藤が伴うものであった。

こうした自己の一部の破壊と再修正を求めるサド・マゾ的両極の狭間で動的に形成される中で、変性意識状態が人の中に構築される。その際、苦悩と悦楽とを共にする恋人との一連の経験を通じて、大切な相手の物事の見え方や世界観との相互交渉がなされていく。その「他者」から、自己に多様な世界観がもたらされるところに、物事の捉え方や「知覚を可能」にしていく作用がある（前掲書：下巻236〔238〕）。自己の知覚に他者の知覚が介入していく。一般に、人は、言語活動によって、社会という言語共同体の基盤において「自分」という感覚を構築する。人はその話し合う活動範囲において、他者との関係で自己が生成変化することのできる「可能世界」を形成している（ドゥルーズ 2007 [1969]：下巻235〔236〕）。他者との相互の言語活動を基にして、自己の有り様の痕跡が、過去から現在そして未来へと投射され「可能世界」が広がっていく。こうして、自己の知覚と世界の有り様は、他者によって再構成され根拠づけられ保証されていく。「わたし」の中に介入した「あなた」の知覚は、恋愛感情で繰り広げられる多様な感情の起伏と矛盾した感覚を伴うものであった。恋愛で相手と共有する「可能世界」においては、

惹き寄せられていく新鮮な感覚や喜びもあると同時に、日常生活での他者とは違った存在として圧倒的な過剰性や戸惑いや疲弊感をも伴う。そこには、生の喜びや多幸感だけでなく、苦悩や葛藤や曰く言い難い違和感、時として、それらは過剰な感覚ももたらす存在であった。時間の流れの中で、多様な状況が絡み合いシニフィアンの連鎖反応によってシニフィエとしての豊穡な意味合いや葛藤や脆さすら立ち上がる。

愛し合う者同士の間には多様な境界線が構築され、またその関係性も脆弱性が孕むものである。二人の関係に境界線の痕跡を多様に形成する間隙の狭間から、人が夢中にならざるを得ない生の原動力としての「対象a」があった。見てきたように、ラカン・ジジエクは、生まれた時の所与の社会的環境ものとして想定して、そこから立ち現れる差異や距離から至高な感覚としての恋愛が立ち現れていた。だが、もはやこれは、婚姻や社会階級などに限って形成されるものではなかった。つまり、限界や脆さや苛立とは、逐次言葉の中で多様な状況から構成されるもので、この生の躍動の根源をジル・ドゥルーズは、ラカンのモデルを発展させて「対象x」とした（2003 [2002]：85-90；2007 [1968] 上巻：285-287）。自己はいかなるものであるかという「問い—問題」の絶えざる過去から現在そして未来に向けての反復作用によっ

て生み出される(ドゥルーズ 2007 [1968]: 下巻 77)。この「問い」は到来することのない未来に向けてのもので、「ゲームでの賭け」と連動する。その舞台は、波動と振動と享樂と安堵など多様な感情の起伏を避け難く伴い、それも永遠と反復され終わることがない。なぜなら、言葉は「意味内容」の

「伝達媒体/代理物」であるにすぎないがために、言葉自体は、意味を固定させる文脈がないと意味のない「空虚」を抱え込んでいるからだ。更に、コミュニケーションの過程において、相手への思いを伝え、解釈しあうという相互行為においては、言葉のみならず、ありとあらゆる相互の働きかけやなんらかの行動が、逐次確認され、多様に解釈される。つまり、自分の思いや情念を伝えようとしても、それは代替されたものにすぎず、その思念そのものではなく、絶えず、差異を伴い反復されることなしには、相互理解は不可能である。ゆえに、相互理解のプロセスとは、欠如と不安とを孕むもので、そこから多様な自己の有り様が形成されていく。この欠如を、相手との関係で、補填したいという欲望につながる。欲望と承認の関係は固定された静止したものではない。逐次、構築され、確認され、取り入れられ続けられない不安定で動態的なものである。つまり、言語自体が、欲望や意味の代替物であるがために、そこに人は多種多様な意味を構築して行く(前掲書 2007 [1968] 上巻: 282-285)。ここに、

言語の過剰性と共に、その根底にある深層の構造の作用の効果によって、人は豊かな人間性を多様に形成していく。したがって、こうした不安定な意味を土台としているがゆえに、人間は豊穡性を感じると同時に、どこか欠如した不安定性を伴う両義的存在となる。

一連の恋愛関係にまつわる動的な文化構築の有り様とは、逐次他者との無数に展開される諸経験において諸自我が構成されている。つまり、他者とは創造上、想像上の、未知のものでもあるだけに、流動的かつ到達不可能性限界性を孕むものである(前掲書 2007 [1968]: 上巻: 281-286)。恋人同士の前広がる可能世界は、互いに構築していくもので「ゲーム上でのさいころの一振り」という選択で、いかようにも変幻していくものだ。二人の前に広がる未来は、出会うとしても不可能である。「自己が納得し完結した形で自分の思うようには決していかない」という意味で限界があり到達ができないがゆえに更に追い求めていこうとする。そこから「崇高的理想的価値概念」が立ち上がる。ここに恋愛対象が特別に見える装置が絡んでいる。恋愛とは、そうした「対象x」との出会いであり、合一しようとする試みである。それが完結することなどありえないからこそ、そこから豊穡な意味合いを異なる女性達が異なる物語を編み出して行く。多様な複数の他者との巡り逢いの中で、「友達感覚」だけでなく「家族

のような関係性」と同時並行的に浮気も肯定する所に多幸福感を覚え、自己超克を見据えた「挑戦」という果敢な思いを抱く。恋愛に伴う激情の過剰性の波の中で、その試みに打ち砕かれそうになる時であれば、そのこと自体に愚かさを覚え、敢えて、囚われることに拘らない時もあった。この感覚は、女子大学生達の、恋愛に関する多様な人間関係の中で、喜びを感じては戸惑いを覚え、夢中になっては一体自分は何なのだろうと虚無感を抱く等々の一連の両義的感情である。相手の自分への好意を大切にしつつもシニカルに恋愛を捉え、複数の「欲望する男性」との関係を終わりにすることができるのは自分であるという自尊心も表れる。ただ、恋愛にゲーム感覚で享楽を覚えまた相手の欲望を「見下している」女性 は、果たして自分はこれで「人として見下されて」しまい「嫌われて」しまうのではないかという自己もあった。これらの多様な意味との戯れの在り方から生まれる「自己」の有り様は、逐次、相手との多様な交渉の中でもたらされるとい う断片的な側面を抱えており、一貫したものとして構成されてくくものではなく（前掲書 2007 [1968]：上巻：250-251）。

「わたし」の中にある大切な相手としての「他者」は、自らが構成した存在である。自己の中にある「わたし」という感覚と特別な位置を占めるその「他者」の存在の有り様の狭

間に、多様な物語が構築されていた。そこに多幸福感、忘我感、高揚感とともに苦悩や葛藤という両義性が介在していた。自己の中で悦楽感や自尊心を抱きながら、波動、振動、揺れとを生み出していくものであった。恋愛する自己とは相手との関係において、その心と身体で疲弊感や享楽の中で情動的起伏を生み出していく。こうした両義性を包含する形で振動し多幸福感や葛藤を味わうことを経験させるのが恋愛である。こうした「身体」とは、文化として構築された身体、通常の自分とはまた別の自己、あるいは通常意識しないものを感知できる変性意識状態を伴う自己としての「器官なき身体」である（ドウルーズ II ガタリ 2006 [1973]）。愛し合う二人は、相手を特別な思いと心象風景を重ねて見ており、他の者では「見えないものを見る」ことができ、そのイメージを支配し所有しようとする。そして、この「見えないもの」は人を魅了していくが同時に圧倒し困惑させる。ドウルーズは、画家は、通常の状態では感覚不可能なものを絵画に描く諸力があるとし、キャンバスに「見えない諸力を見えるように」させると分析している（ドウルーズ 2016 [2002]：80）。そのイメージを形成するプロセスは動的なもの、時間の流れで変動する。画家が絵に投射する作業は、恋人同士が相互に相手に対して見出す多様な感覚の文化構築の一連の作業と結びついている。恋愛を経験する媒体としての器官

なき身体は、「知覚過敏」を伴ない、通常の知の判断から覚醒した状態をもたらす。恋愛感情で全てが変わったと思つた時の瞬間とは過剰であり、相手の一挙手一投足、僅かな表情、言葉や身体の動きに「対象x」が作用している。

こうして自分を承認する肯定的に捉える他者を見つめ見つめられる時に、感じる心の有り様とは、時間の流れなど関係のない麻痺した感覚である。ゆえに、恋愛主体にとって相手とは、自分をならしめる存在であるが、その眼差しに応えようとしても応えきれぬ到達地点など存在しない不可能な磁場を提供し、トラウマ的な感覚をもたらす。自己の安堵感や至高感は置換されていくため、その欲望を満たそうとするプロセスとは永遠に延期され多様な形で実践されていくものである。その不可能性ゆえの葛藤や不安にマゾヒスティックな感覚が伴う。愛する相手と共にあることで、少しのことでも夢心地になり、あるいは豊かさを覚え、時に過度に敏感になりつつ「生」の有り様について歓喜と同時に苦悩、悦楽と同時に困惑という両義的感覚がもたらされる。そうした情動の彼方に自己をも見出そうとしないではいられない。だが、それは絶えず代替的行動で、目的は失敗に終わる。この果てしなさに空虚感ややるせなさ、あるいは、ふと我に帰りそうした自分の行動自体が奇妙にさえ思えてしまい、一体自分とは何なのか分からなくなる感覚さえ味わうこともある。

一連の矛盾した心情が埋め込まれている恋愛のプロセスが意味するものは、自己の有り様の代替不可能な「他者」との動態的揺らぎの中において疎外と孤独を埋め込んだ「個人化社会」の現実環境において、恋愛主体がその中で人とはいかなる存在であるかを探ろうとするものだ。「わたし」に他者の眼差しを取り入れることにより、自己を確認していくが、それは理想化されると同時に脆弱性を知らされる。故に、それがいかなる消失感や悲しみや苦しさを伴おうとも、人は恋愛に耽溺し、そこに、余計に過剰な意味合いを読み取る。更に、たとえ恋愛パートナーの存在があっても、無意識に別の新しい世界を夢みつつ他の異性に身を委ねることで自らの「空」を補填しようと試み、果敢に新たな自我を形成しようとする。恋愛する感情とは、「内なる異性」、「構造としての他者」との遭遇で多様な視点を吸収し、多様な諸自我を形成する。恋愛によって、葛藤と苦悩と同時に至高感と至福感との両義的感情の狭間に振動と波動を体感していき、そこからまた新しいアイデンティティが構築されていくのだ。

結語

これまで、日本文化の伏流から再構築され肯定されてきた「遊戯的感覚」としての恋愛、何か結論や到達地点を見出す

うとするのではない「消費型感覚」としての恋愛、「真剣」な「生産型恋愛」等々の多様な恋愛感覚の根底にある諸相に、主にポスト構造主義的な射程をあてて脱構築してきた。そこで浮かび上がる多様な「波動」としての自分、「知覚麻痺」としての自分、「見えないものが見える」自分、「未来の可能性を投射してみる」自分、「自己の内的異性を投影する」自分、「内的な安堵感や心地よさ」をえようとする自分、「苦悩をそのまま引き受けて葛藤する」自分、「今の自分に満足せず自らをマゾヒズム的に崩壊させ新たな自分を形成して相手との合一を試みようとする」自分、エトセトラ、エトセトラ。現代の恋愛経験において、人は多様なアイデンティティ構築をしていき、また、そこに豊饒な意味合いとしての「対象x」を享乐的に追求しようとする。こうした「自己充足的」なアイデンティティ構築の諸相を、「対位的」にグローバルズム言説という「構造」としての「樹木状」の「メインストリームカルチャー」に布置した時、見事に、その「反構造」としての「リゾーム状」の「カウンターカルチャー」としての側面が浮かび上がる。すなわち、多様な恋愛において人が追求しているものとは、崇高的感覚であれ、遊戯的感覚であれ、自律的感覚であれ、女としての自尊心であれ、その有り様や強度が異なっていると、相手を通じて心身を多様に任せる他者との対話という時空間を共有す

る磁場である。そうした心的享樂とは、グローバルズム資本主義社会を押し進めたネオリベリズムが存在理由とする諸々の思考―目的を達成すること、合理的な理性判断をしていくこと、効率的に物事を解決していくこと等々、例えば数字に変換されていくような市場主義の思想―とは、質的に異なったものだ。むしろ、そうした有り様とはまた別のオルターナティブな感覚と感情と情動とを生み出すものが恋愛である。グローバル社会での「隣人」や「他者」とは、自己の存在価値を市場原理主義の中で評価付け生活世界を可能にする存在であるが、異なる状況では、脅かしをかけ、貧困状態すら自己責任だとする冷酷無慈悲な存在でもある。こうして、この日常の新自由主義による徹底的に合理化され効率化され合目的性を執拗に求めてくる現実世界で「不安」を抱かせる環境に晒される彼女達にとって、恋愛とは、それらの有り様を攪乱する磁場でもあった。

恋愛主体の「他者」の存在感とは、そうした現実秩序での「他者」の自分にとつての存在感とは、全く異なる類いのものだ。恋愛感情は社会秩序での規律規範とは無関係な形で、自己生成の中に徹底的に入り込んでくる。こうした意味でも、恋愛は歴史を通じて社会秩序そのものを無視し、あるいは脅威をもたらすことさえあるものという点で、「狂気」とみなされてきた。日常生活世界では起こりえないような時

空をもたらず「非日常」的状态、日々の生活における意識とは質の異なる自己をもたらず「変性意識状態」を形成する恋愛とは、こうしてグローバル資本主義社会という「日常」に抗うというポリテイカルな作用が確かに存在する。

恋愛当事者同士では、お互いに他を配慮し、また時に、遊戯的に関係を形成し、自らの生の在り方や社会での立ち位置を踏まえつつ、孤独であることを噛み締めながら、感情の共有を試みていた。その中で、自己陶冶として自らを律していく姿が浮き彫りになり、そこに安堵感や納得感を持ち恋愛感情を肯定していた。同時に、恋愛する女性達は、その過剰さと共に、自分でも理性的にも分別のつけ様の無さ、相手との関係の揺れに伴う自己自身に走る多様な亀裂や脆さと共に孤独感を垣間みる磁場でもあった。このようなプロセスの渦に巻き込んでいくのが恋愛で、一人の女性の果敢な生き方が錬磨されていく諸相、またそこに介入する、今の自己を改め否定しつつまた新たな自己を生成させようという無意識の構造も介入していた。異質な他者を自らに取り込んでいくところに生じる喜びや安堵と同時に苦悩や戸惑いという両義的な矛盾した感情があるからこそ、言葉では説明しがたい自己、時にその姿そのものに新しい自己を鑑み挑戦していこうとする思いも生まれる。同時に、この自己「回帰と錬磨の構造」には、変性意識状態がもたらされており自己を修正否定しつつあら

たな自己生成へと多様な試みが産み出されていく。こうして恋愛感情を体感していくことで、相手との眼差しの相互の投射で生まれる感覚によって自己省察がなされ、生に活力を与えていくものとなっていくのだ。

註

(1) ヴィルノはこうした変化と多様性に囲まれた労働者は、一貫した自分であるという感覚を持ちづらく「不安」「懸念」「怖れ」を抱くようになったとしている(2004)。

(2) ジェクは祭儀や婚札や通過儀礼を行うところから生まれるエスニック・アイデンティティが共有されている地域共同体は、実は、その存在を脅かす「他者」があるために「何かそれ以上の特別なもの」だと感じられるものであるとしている(2006 [1993])。

(3) ここでの「ゲーム」は、日常においての自己実現の生活世界において戦術や戦略を必要とするフォーコーの「権力のゲーム」を援用している(2007)。勝負の世界はとかくこのような感情を人に埋め込む。解釈人類学者クリフォード・ギアーツによるバリ島の闘鶏についての有名な論文「ディーブ・プレイ」とも連動する感覚である

(1987 [1973])。すいでは、二羽の雄鶏を飼い主同士が戦わせ、普段関係する家々や知人同士がその鶏に多額の賭け金をしていき、そこで、勝った時に味わう名誉や贅美、あるいは負けた時の屈辱感と慟哭が、普段の洗練され統御した「ハルース」の感情とは違う情動が体感されていく。

(4) バトラーは、個人は実は多様な他者達があつて初めて構築されていく社会性のあるものであるという「人間であることの前提条件」を論じている (2007 [2004])。行為遂行的に他者との関係性においてアイデンティティが言葉の中で構築されていくという議論を、この本ではイラク戦争やアフガニスタン侵攻によって人の命の「非人間化」がなされ、そうした行為は決して正当化されてはならないことであつて、人とは絶えずそうした他者の傷つき易さを認め合うことが求められていることを力説している。

(5) こうした自己闘争から自己構成というプロセスは、フーコー (2004) によって詳説され、三～五世紀ヘレニズム—ローマ文化のキリスト教徒の「メタノイア (これまでの自己を批判的に見て修正し変えていく精神)」と連動する。ここでは、自己を更新させていき、省察的に誤った判断をしないようにしていくことを目指そうとす

る姿勢である。

(6) ドゥルーズが『差異と反復』の中で、なんらかの決断をする時、あたかも賭け事のように、今の状態を改め「勝ち」を予測しつつも、その後何が起こりえるか分からず多様なものもたらされる感覚の比喩として使った言葉 (2007 [1968] : 41 : 312)。

(7) ブルデューは「運命の出会い」など所詮その人の置かれた社会階級や家庭環境や学校生活等々での諸経験から説明できるという視点をとる (1990)。つまり、本人が育てられてきた社会的教育的環境によって、価値観や感覚や雰囲気という人の有り様を「ハビトゥス」として形成していき、その類似した感覚を持つ「ハビトゥス」を持った相手と「親和性」を持つようになるという見方をとっている。ここではそうした出会いにおいても、多様な相互交渉や自己修正や葛藤があるという恋愛経験において伴う感情の交錯に照射させている。

(8) 生物人類学者ヘレン・フィッシャー (2007 [2004]) は、脳科学の技術から「fMRI (Functional Magnetic Resonance Imaging) : 機能的磁気共鳴画像」(脳や脊椎の活動に関連した血流動態の反応を視覚化したもの) から解明されている一連の脳内物質の流れを測定した。恋愛している人を対象に、恋人の写真を見せて、いかに

脳内において血流が起るかを分析した。尾状核という脳の大脳基底核に位置する神経核が活発に活動していることが分かっている。

(9) ジジエクはラカンの理論に依拠しつつ、バトラーの言説から行為遂行的に立ち上がるこうした文化のリアルな諸相を反駁している(2007 [1999])。他方、バトラーもラカンの視点をフーコーの理論を参照し反論をしている(2012 [1997])。こうした理論的な議論の展開は、文化人類学の理論においてもあり、レヴィーストロースの普遍的思考を追求する「深層の構造」を分析する視点を批判し、文化的意味の構築の「解釈」に焦点をあてていく重要性を主張したギアーツとの間でもなされてきた(ギアーツ 1996 [1988])。

(10) 中沢新一がチベット密教の修行において目指した感覚もこうした文化人類学的思考と連動したものだ(1983)。スーダン北部のイスラム系民族ホフリヤトにおけるシャーマンに他の人間の霊が憑依して、女性の病を治療をする時の状態もこの境地である(Boddy 1989)。こうした至高感や変成感覚をより日常生活に見いだそうとしたアーノルド・ミンデルは、アメリカ先住民、オーストラリアアボリジニ、アフリカの諸部族のシャーマンの比較考察をし、その心的状態が「至高体験」であると

し、現代社会の中に立ち現れる諸相の一般化を試みている(2001)。聖なるものに日々の実践や態度行動を通じて達することができる感覚と連動している。

(11) 「霊性」は生命そのものを生み出すエネルギーでもあり、人はそこから魂の息吹を感じ、そこに恩恵を感じたりしている。この命のエネルギーや恵としての霊性には、包み込むような母性性もあり、動的エネルギーをもったものである(鈴木 1944)。

(12) 「中空」という感覚は日本の神道の神々の関係にも見出され、日本人の自己意識の根源に「母性」として介在していることを河合隼雄は指摘している(1999: 2013)。

参考文献

- バトラー, J. (1999 [1990]) 『ジェンダートラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社 (Butler, J. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge.)
- (2007 [2004]) 『生の危うさー哀悼と暴力の政治学』本橋哲也訳、以文社 (Butler, J. *Precarious Life: The Power of Mourning and Violence*. New York: Verso.)

- (2012 [1997]) 『権力の心的な生—主体化服従化
に関する諸理論』佐藤嘉幸・清水和子訳、月曜社
(Butler, J. *Psychic Life of Power: Theories in Subjection*.
Stanford: Stanford University Press.)
- ブルデュー、P. (1990) 『デュスタンクシオン—社会判断
力批判』石井洋二郎訳、藤原書店
- チクセントミハイ、M. (1996) 『フロア体験—喜びの現象
学』今村浩明訳、世界思想社
- ドゥルーズ、G. (2007 [1969]) 『意味の論理学』(全二
巻) 小泉義之訳、河出文庫 (Deleuze, G. *Logic du sens*.
Paris: Les Éditions de Minuit.)
- 2003 [2002] 『無人島 1969-1974』小泉義之他訳、
河出書房新社 (Deleuze, G. *L'île déserte et autres textes*.
Textes et entretiens 1953-1974. Paris: Les Éditions de
Minuit.)
- (2007 [1968]) 『差異と反復』(全二巻) 財津里
訳、河出文庫 (Deleuze, G. *Différence et répétition*. Paris:
Presses Universitaires de France.)
- (2016 [1981]) 『フランシス・ベーコン—感覚の
論理学』宇野邦一訳、河出書房新社 (Deleuze, G.
Francis Bacon: Logique de La Sensation. Paris: Éditions
du Seuil.)
- ドゥルーズ、G. & F. ガタリ (2006 [1973]) 『アンチ・
オイディプス—資本主義と分裂症』宇野邦一訳、河出文
庫 (Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'Anti Édipe:
Capitalisme et Schizophrénie*. Paris: Les Éditions de
Minuit.)
- (1987 [2010]) 『千のプラトール—資本主義と分裂
症』宇野邦一他訳、河出文庫 (Gilles Deleuze et Félix
Guattari, *Mille Plateaux: Capitalisme et Schizophrénie*.
Paris: Les Éditions de Minuit.)
- フィッシュャー、H. (2007 [2004]) 『人はなぜ恋に落ちる
のか—恋と愛情と性欲の脳科学』大野晶子訳、ヴィレッ
ジベッタス (Fisher, H. *Why We Love: The Nature and
Chemistry of Romantic Love*. New York: Henry & Holt
Company.)
- フーコー、M. (2004) 『主体の解釈学—ローレンジュ・ド・
フランス講義 1981-1982年度』広瀬浩司・原和之訳、
筑摩書房
- フーコー、M. 渡邊守章 (2007) 『哲学の舞台』朝日出版
社
- ギアーツ、C. (1987 [1973]) 『文化の解釈学Ⅰ・Ⅱ』吉
田禎吾他訳、岩波書店 (Geertz, C. *The Interpretation of
Cultures*. New York: Basic Books.)

- (1996 [1988]) 『文化の書き方／読み方』 森泉弘次訳、岩波書店 (Geertz, C. *Works and Lives: The Anthropologist as Author*. Stanford: Stanford University Press.)
- 葛西賢太 (2010) 『現代瞑想論―変性意識がひらく世界』 春秋社
- 河合隼雄 (1999) 『中空構造日本の深層』 中公文庫
- (2013) 『日本人の心を解く―夢・神話・物語の深層へ』 岩波現代全書
- ラカン、J. (2002) 『精神分析の倫理』 小出浩之訳、岩波書店
- ミンデル、A. (2001) 『シャーマンズボデイ』 青木聡訳、藤見幸雄監訳、コスモス・ライブラリー
- 中沢新一 (1983) 『チベットのモーツァルト』 せりか書房
- 鈴木大拙 (1944) 『日本的靈性』 岩波文庫
- ターナー、V. (1976) 『儀礼の過程』 富倉光雄訳、思索社
- (Turner, V. 1969. *Ritual Process: Structure and Anti-Structure*. Ithaca: Cornell University Press.)
- ヴァイルノ、P. (2004) 『アルチチャーノの文法』 広瀬純訳、月曜社
- ウィルバー、K. (2008) 『インテグラル・スピリチュアリティ』 松永太郎訳、春秋社
- ジジエク、S. (1996 [1994]) 『快樂の転移』 松浦俊輔・小野木明恵訳、青土社 (Zizek, S. *The Masters of Enjoyment*. Verso.)
- (2006 [1993]) 『否定的なもののもとへの滞留』 酒井隆文、田崎英明訳、ちくま学芸文庫 (Zizek, S. *Tarrying with the Negative*. Duke University Press.)
- (2007 [1999]) 『厄介なる主体―政治的存在論の空虚な中心』 全二冊、鈴木俊弘・増田久美子訳、青土社 (Zizek, S. *The Ticklish Subject: the Absent Center of Political Ontology*. New York Verso.)